二人めの子

（上之巻）

（一）

芝露月町の藤の湯とある長暖簾を推分けて「淺くとも清き流の杜若」。と出端のありさうに顯れたる女子二人いづれも長湯に磨ける顔色は鑒々と赤く。對の高島田に髪飾も同じ好み。年長たる方は。容貌優れて麗はしく。十九ばかりなり。他は二歳も年少と見えたるが。女子には厚肉過ぎて。色さへ白からず。額の左に寄りて。薄けれども三日月狀の創痕あり。美しき方は聲まで清やかに。辯舌爽快にして口數多く作らぬに愛嬌具はりて人を逸さぬといふ性らしく。美しからぬ方は口重く。常に物案じ貌なる陰性に。年齡よりは更けて年長の樣なり。

「鐵ちやん。お前の帶は彼だから可けれど」。と舌敲して。「可厭だねえ私のは。衣服が好くつたつて。帶が悪けりや依然引立ちはしない。どうか爲樣が無いかねえ。」

年少のお鐵は石鹸を包みたる濡手拭にて。小鼻の傍に玉なす汗を一寸拭き。

「あの帶で可ければ貸事をしやうか。」

「然してくれゝば私の方は可いけれど。お前が窮るちやないか。」

「私や構やしない。」

「構はない！そんなら後生だから然しておくれな。其代お禮をするよ。そら彼海鼠絞の半掛を。」

「屹と？。」

「屹とさ！。」

「また嘘かも知れないから。いつそ約束をしない方が可い。」

と呟くやうにいふ。

「可厭な女だよ。折角他が深切に上げやうといふのに。」

「でも此間の半襟もお流れになつてしまつたぢやないか。」

「だから彼半襟は上げられない理由をいつて。あんなに謝罪たぢやないか。あの事もあるし。帶の事もあるから。今度は屹度あげるよ。」

「有難う。」

談切れて無言にて五六間行く。

「姉さん。もう何時だらう？」

「もう九時だらう。」

と言はず語らず急足になる。姉は思ひ出したやうに。

「あのお四季施は何方のお見立だか。華美でなし。質素でなし。實に好柄ぢやないか。銘仙も好ねえ。一寸見ると宛然お召縮緬のやうだよ。」

「大層立派なものを下すつたね。」

「だつてお前。盂蘭盆と若樣の御卒業の御祝と。御祝宴の御手傳のお禮と。三件兼ねてるのだもの。」

「若樣の御卒業遊ばしたのは法律だとね。ぢや代言人だね。あんなお人柄なお方でも代言がお出來遊ばすかねえ。」

「代言人だつて人の悪い代言ぢやないんだよ。」

「それぢや上等の代言人樣だね。」

「ほゝゝ樣付にしなくつても可ぢやないか。」

「だつて若樣の事を呼捨にしちや勿躰ないよ。言葉遣ひに氣を着けないとお母樣に叱られるもの。」

姉は苦笑をして。何か言はむとする時。通りかゝる男に眤と顏を視られ。少し横を向て遣過し。

「お名前でもいふんなら樣付にしなくつちやならないけれど。何も代言人といふのに樣が入るものかね。代言人樣といふと。何だか鄰家の眇目の三百にも。を付けてやるやうで可厭ぢやないか。」

「さうね。」と肚裏では隨分可笑かつたやうな顏色。

此二女子は某省の極卑いところを勤める丸橋新八郎といふ士族の娘にて。姉の名は銀。妹は鐵。容貌は羽子板の裏表。肖てはゐねど同腹にて。姉は父親肖。妹は母親肖なり。

新八郎は桐村家三代の家來筋にて。今も律義に主從の禮を執つて繁々伺候すれば。同家にても至極心易く思ひ。事ありて人手の足らぬ折は。いつも此同胞を借りて重寶するを。此方は結句有難い事におもふて。お邸へ〳〵と榮譽にして吹聽するほどなれば。此度も桐村の若殿忠準の卒業祝宴に大客をするとて。例の如く手傳に招ばれたるなり。

母親はお銀の立てる後に廻りて帶を結むで遣ながら。

「奥樣にお目に懸かつたら頂戴物のお禮をよく申上げ

なよ。」

「あゝ。」と帶揚の結餘を帶の中へ挿みこむ。

お鐵は自身の容貌の醜きを識りて。餘り念入に化粧するを懌ばず。さればとて塗らねば母親に叱られるゆゑ申譯のしるしに一寸々々と塗りたれば。生地の黑いが衣服を着更へたゞけ目立つて。姉とならべるとお孃樣と下女の如し。

母親は見かねて。

「鐵や。お前の白粉は薄いよ。」

「私や餘り濃のは可厭。」

「濃くなくッても可いけれど。それぢや餘り薄くッて傅けたのだか傅けないのだか知れやしない。最ちッとお傅けよ。私が今手傳つてあげるから。」

「澤山ですよ。これで。」

と急遽帶を結に懸かる。

「鐵ちやん一寸此方を向てごらん。」

「澤山だよ。」

「澤山ぢやないよ。」とお銀は手を伸してお鐵の肩を摑まうとする。

「あれ凝然してお在。」

後から母親に引張られて。「ほゝゝゝ」と姉の笑聲に。

壁を向て帶を結めてゐたるお鐵は。一寸と此方を向くを。お銀は一目見て。

「あゝ眞箇に薄い。もつと傅けておもらひよ。」

「澤山だッてば。」

「澤山な事があるものかね。」

と母親は衝と行つて。お鐵の結懸けたる帶を捉つて。無理に鏡の前に坐らせる。

「年齡のいかないものゝ白紛の薄いのは生意氣で下品なものだ。まして お邸は厚化粧だから。矢張濃くなくッちやいけないから。」

と最一層塗れば。塗られる間も頻に氣にして鏡の方ばかり向きたがる。

「其方ばかり向ちやいけないねえ。」

と小言たら〳〵大分厚塗にして。

「さあ御覽！」

「あら宛然妖怪のやうだ。私や可厭。」

お銀は鏡の中を見込むで。

「そんな美しい妖怪があッて堪るものかね。」

「姉さん多度おいひよ。」とお銀を流眄に懸けて。

「そりやァ貴孃はお美しうございます。」

「あら可厭な。」と流眄に挂返して。

「ねえお母様。ちッとも妖怪の事はありやしないね。」

とお譲らしい銀金具の帯留をぱちんと懸ける。

「白粉を傳けて妖怪なら、先刻見たやうに傳けないくらゐだッたら。なほ妖怪だ。上つ方の前へ出るのに白粉を傳けないのは此上もない失禮だよ。官女方を御覽な。私のやうな年齢をしてゐる方でもみんなお化粧をしてゐるぢやないか。」

といひ〳〵火鉢の前に坐りて煙草を吃しながら。我娘の容姿を心嬉しく眺めてゐたりしが。とんと吸殼をはたき。指頭に袖口を卷きて。

「おほ熱い。」と額際の汗拭き。

「銀や。お前の領は餘り卷着いてるよ。」

お銀は鏡の前へ行きて一寸領に手を懸け。

「此頃は振衣紋は流行らないよ。」

「でも餘り卷着いて。何だか可笑いぢやないか。鋏や一寸此所へおいで。下前が下ッてる。」と上前の褄を少し引いて。

「懷中から手を入れて少しお引張り。あゝよし〳〵。」

となほ飽かず二子の容姿を見較べて。

「人力車の來るまで其所へお坐りな。」

同胞は人形のごとく取繕ふて坐る。母親は左視右瞻。

「まことに好衣裳だよ。よく似合ふ事といつたら。」

お銀は大事さうに疊みたる絹の手巾を取出して。胸の邊を扇ぎながら。お鋏の髪を見てゐたりしが。窓より來る風に髪の毛の二三莖解れたるを撫でつけてやり。

「今日の髪は好く出來たね。母様。」

「まことに上品で好よ。」

がら〳〵と車の音の門口に止りたるに三人齊しく振向けば。格子戸開きて。

「へえお車が參りました。」

「そらッ」といふ聲の下どたばた。ばた〳〵。

（二）

築地なる桐村家にては晩凉よりの宴會にて。當日の上客は。伯子男の華族十餘名。外に一族藩士五十餘名。廣間の簾を高く揭げて。風を入れ。庭を見せ。燈籠三が所に火を入れて。星影を池水に映し。小華嚴といふ瀑の前の岩陰に灯を伏せて。坐敷より迢に玉なす水を見せ。椽より遠からぬ萩畠の繁茂に蟲籠を忍ばせ。松虫鈴虫の聲々席に亂れて。客に扇をつかはせぬ懇待の趣向。衆人杯を片手に見曠す折から。四阿の後に聳ゆる老松の梢に十八日の月の懸たるは。一段の

馳走なり。來賓總代として某伯爵が簡單に卒業の祝詞を述ぶれば。忠凖答辭をなし。續いて一族總代の祝詞藩士總代の祝詞。之にも答辭ありて。滿場拍手の裏に表向の儀式が濟めば。席上は上客より亂れ始めて涙の碎くるごとく。末席の方も次第崩れかゝる頃。無禮講にして賑かに。とある家令の聲懸に。此上はいづれも君の御爲討死といふ覺悟で。いよ〳〵亂酒になる。

席の末の方に柱を後にして。大禮服をいためつけて。白りぬんの胴衣に黄金鎖を山形に懸け。頸の括れるやうな前折の衿に。針は黄金の浪に旭と見せたる紅玉を摑ませ。氣になるほど袖釦の煌々は金無垢の狂駒。目貫の直し物と見えたり。年配三十六七。大肥として。髮は濃く。毛頭渦卷く癖あり。口髭は束ねて取着けたるごとく。硬くして長く黑く。眉毛は小氣味よく一文字に際立ち。圓栗眼に一種の光を帶びて。顏色は古りたる素銅の如し。

實印を彫りたる黄金の指環を小指に穿めたる。左手の拇指と中指と藥指との三本にて「はばな」の太卷を輕く持ち。かの一種の光ある眼を側てゝ。始終お銀の擧動に注ぐを。隣席にゐる藩士の山口昇といふ中老漢が認めて。

「御意に召しましたか」と突如に囁く。

黄金鎖。黄金釦。黄金針。黄金指環と。黄金ずくめの紳士は某省の會計課長にて。囁きしは屬官なり。

「御意に召しましたか。」と星を貫されて。澁谷課長は悸然。然あらぬ躰にてぎろりと山口に瞳を轉じて。何とも言はずに微笑を含めば。山口は「で御坐らうが子。」といふ面色で。

「あの紺飛白の……今立ちました。彼で……。」と扇子の尾で指せば。澁谷は大きく空笑ひをして。

「まア一盃差さう」と麥酒の硝子盃を山口の前に置く。

「これは。」と一寸戴き。前列に酌をしてゐるお銀を呼寄せる下心にて。

「一寸お酌を。」といへば。お銀が振向くと齊しく。横合からする〳〵と來て。

「麥酒でございますか。」と壜の銃口を向けたお敵は。名もなく雜兵といふ躰。但し冑は目指せし御大將と同じく。此家の小間使にてお種といふ蓮葉なり。

澁谷は山口と眼を見合はせて。竊に苦笑を取交はせ。

餘所を向いて煙草をふかり〳〵。知つた顔ゆゑ。山口は折角酌に來たものを素氣なくもしかねて。

「お酌は實にお種さんの事だ。」

空々しい愛想に澁谷はくす〳〵と笑へば。山口も可笑くなつて。くす〳〵。何だか理由は解らねど。二人が笑ふから。お種もくす〳〵。

山口は左手を衝いて右肩を斜に突出し。ぬつと頭を伸じて。

「お種さん。」

「はあ。」と眉を搖かして顔で嬌態をする。

「あの娘ね。」と順で答つて眼で見當をつける。

「どれでございます。」

「其さ。」「お銀さん?」といふ聲が大き過ぎたので我を呼ぶのかとお銀は振向いて。

「何御用?」

「いゝえ呼だのぢやないの。」

「然う?」とまた後姿になる。

お種は聲を潜めて。

「あれで御坐いますか。」

「さうさ。あれはたしか御家來の?」

「はあ丸橋といふ……。」

「うむ」と反身になつて「さうだッ。」と膝を拊つ。

「大層感心あすばしますのね。」

「なか〳〵別品だね」と扇子ぱッちり。

お種は手巾を口に當てゝ首を縮め。

「ふゝゝゝ。」

「何を笑ふんだ。え。何が可笑しうござる。」

「でも貴下は御前樣の前だと苦い顔をして。眞面目な事ばつかりおつしやつてゐらつしやる癖に。今夜に限つて否な事をおつしやるから……。」

「酒を飲むと誰しもかうなるものだ。」「嘘ばッかり。」と樣子笑ひをする。

(二)

山口は用ありさうに眞面目になつて。

「時にお種さん。」

「はい。」と釣込まれてお種も眞面目になる。

「あの娘のお酌といふので一盃飲みたいね。」

お種はついと傍を向いて。

「多度召上りましな。」

「はゝゝゝ。一盃願ひましやう。美しいのに。」と猪

口を出したは。餘程御機嫌を取る氣なり。

「御遠慮なく……。」とお種膝の上に手を重ねてちんと澄ます。

此所山口昇大狃忙の氣味合にて。頻りに猪口を荷にして。お種の顏色を覗つてゐる。お種は何と思つたか衝と銚子を持つて。

「どうせ私のやうなお多福のお酌では……。私は彼方へ御遠慮申しませう。」

腹を立ちましたよ。はい。眞箇に腹を立つたんですよと言はぬばかりに。くつ〳〵と口を搖かして。傍を向いて凛然と立懸ける袂を。竄してなろか。と山口が捉へて。

「さう何も怒らんでもいゝぢやないか。」

「あら可厭。怒りはいたしませんよ。」

「怒らんなら。そんなにぷり〳〵せんでも……。」

「どうせ心太の柏子木でございます。」

「これは御挨拶だ。」と少禿の頭顏を撫でゝ。

「まづ其處で中和にお酌を。」と盃を出して。お種の顏を覗いて。

「實はね。あの娘の……何といふ名だえ？……知らない？ぢや其知らんちやんのお酌で。私が飲みたいなんぞッて。さう〳〵さうした譯ぢやないのさ。此方が。この澁谷さんが……のお酌で是非……。」

といひ懸けると。澁谷いとんと山口の肩を撞いて。

「怪しからん事をいふ。我は知らんのだよ。」とどういふ氣でか眞顏に辨明する。其顏をお種が見て。くつと冷笑を飲込み。此面相ならば。とでも思つたのか。但しはお銀を玩らうとでもいふ了簡でか。後を振向いて。

「お銀さん〳〵。」と呼びかけて一寸手招きをすると

「何？」といひながら來て。山口の正面。お種の隣に坐る。其手をお種が矢庭に捉へて。

「山口さん。御執心のお銀さん！」

「いやなお種さん。」とお銀は羞かしさうに横を向く

山口は澁谷に一寸目授をして。

「いやお銀さん。」と透さず斫懸けると。お銀は窮屈さうに會釋する。

「一杯戴きましやうかな。」

「お酌を……。」と銚子を持つ。

「結構々々。」と猪口を出しながら。お銀の顏を瞥見に大概測量して。一寸氣を變へ。

「澁谷さん。お銀さんのお酌といふので御一盃如何で

でございます。」

澁谷は故と然あらぬ顔で。冷淡に「可からう。」とばかり。何も言はず大風にぐつと硝子盃を差出せば。お銀は膳を斜に向けて。少し躙寄つて酌をする。

見たいと思ふ人の正面には坐るなの格言の通り。澁谷の烱々たる巨眼も。此場には平生の力を失つて。猪口を出す。壜を出す。其瞬間に瞥見したばかり。年効もなく羞かしいといふ氣味で。好加減に盃を引て。口に持つて來て。飲みながら盃越に可厭な眼をして昵と視る。お銀は山口の眼色の可笑らしいのを早くも見て取つて。薄氣味悪く思ふる箭先に。さなきだに好かんたらしい眼光の澁谷に秋波を注がれて悚然として。何となく居心の悪さに立たうとすると。お種が袖の下で手を引張てゐて一向放さず。立たうにも立たれず。居るのは快くなし。進退維谷つて咨且してゐる。

澁谷は飲みながら是ぞ好下物といふ顔で。お銀の容貌を耽視する眼から。例の刺す如き光は射せど。それと和してまた名狀すべからざる一種異樣の光の見えるは恐らく其刺す如き光の「愛」に蕩けたるならむ。と難解言へばて謂ふのなり。

話次分頭。この席の酌人は藝者半分に素人半分といふ調合で。藝者は新橋の精選と見えて。流石に可憐の春色も見える。素人の方は一群盡とく「つぶし」といふ中で。お銀の美貌は光明を放つかとばかり際立つて藝者も頻にお銀の進退には目を側てゝ嘯き合ふほどなれば。無論滿坐の客は現になつて。衆心一人を逐ふて移るといふ。狀で一見の客も名を聞覺えて。お銀が前でも通ると。爲懸けた談話を輟めて。「お銀ちやん！」などゝ温言で呼留める。

就中某伯と來たら。眼を絲の如くして。お銀〳〵と懊惱いほどのお聲懸りで。少し御自身の前に見えぬと。酒を飲でも甘うない。と金閣寺の大膳懸りで。頸を延ばして「お銀は居らぬか」と御意ある時の鼻下の寸を玉八といふ人の悪い老妓が。杉箸を鉛直に立てゝ。遠くから測量して。高島屋の忠彌といふ身をやつて。妹藝者を笑はせてゐる。

遂に此所に居る聟がお目に留つて。早速彼を喚べとの御意に。お爲といふ小間使が勅使三度に及ぶといふ始末。

「お銀さん。一寸でも可いから來て下さいよ。私が窮るわ。」と泣聲を放つ。

「はい唯今。」と立たうとするを。此時は山口大分酩

酊の呂律で。

「まあ可いちやないか。何。室山の御前樣のお召だ？　然う？」

とつまらなさうな顏色。べろりと舌を長く出して唇を舐ずり。

「あの御前も御高齡にましましながら。いつも〳〵お助兵衛な御前だ。」

「あれ聞えますよ。」とお爲とお種が口を揃へて注意する。

「へゝゝゝ」と冷笑して。聞えるものなら勝手にお聞えなさい。」

と身體はぐな〳〵。眼ばかり据ゑて。一向多愛ない事を立派さうに云ふ。いつかお銀が立て了つたとは氣が着かず。

「お銀ちやん。ねえ丸橋銀子ちやん。氣を着けないと不可せんよ。あの御前といふものが。いやはや尋常ならぬ助前だからね。高い聲では申されぬが。（どうか聲色のやうなれど。誰のやら當なし）一躰華族といふものは士族平民より一倍お好色で。お執濃くてあらつしやる譯のもんだから。お給仕は辛いよ。ねえお銀ちやん。」と再舌舐ずりをして。細い眼を無理に睜いたが。

「おや不仕！　不在ねお銀ちやん。いや遁した〳〵。お前たちは。」

（四）

澁谷は翌日の退省に山口を伴歸り。容間の椽近に。ホガニーの小卓子を据ゑて。これに淡泊とした者を三品ばかり列べ。獻酬なしと定めて。小さな臺付の硝子盃と京燒の小德利を銘々に控へ。山口は葛布の洋服を脱ぎ。棚にぴんと張つた客浴衣に衣更へて。紅革の裃の上に割膝をして。庭の盆栽棚に咲懸けた柘榴の盆栽をまじ〳〵眺めながら髭を撚つて待つ所へ。主人も浴衣になりて。濡髮を拭きながらのつし〳〵と出て來て。

「いや山口さん。貴下も冷水で一寸顏をお洗ひなさらんか。」とどつかり裃の上に胡坐を掻く。

「いえ私はこれで結構でございます。」

「水で顏を洗ふより。これで口を嗽ぐ方がいゝです か。」「うふ」と笑ひながら山口の盃に盈々と注ぐ。

「これは〳〵。貴下まあ。」と德利に手を懸けるより早く。澁谷は獨酌してぐつと一息に飲干し。

「あゝ蘇生した。貴下も早く蘇生なさい。」

と無雜作に茶椀の汁をちゆうと吸ふ。山口ハ盃を一寸戴いて口を着け。下に措いた手で箸を取つて。洗魚の摺山葵を醤油皿の中に摘み込むで。二つ三つ搔廻しながら。

「時に彼ハ眞實御媒妁をいたすのでございますか。」

「勿論願ひたい。」

「然しちと若過ぎいたしませんか。」

「若い方なら過ぎても苦しからずだね。はゝゝゝ。」

「そりやまあ老婦よりは宜しいに相違ございませんけれど。どうも此家の經濟を切廻さうといふにハ。」と輕く首を拈つて。「どうでございましやうか。」と尻上りに言切る。

「そんな事は搆ハんぢやないか。經濟といふた所が格別至難い事は要らんし。二月か三月も慣るれば。誰にでも出來る事だ。」

「へえ。」と山口は思案してゐる。

「出來んのなら白癡ぢや。白癡ぢやあるまい。山口さん。」

「白痴な事は。それは。那麼事はございません。」

「白痴でない以上は出來るよ。我が保證する。」

「所で貴下ハ宜しいと致して。いかゞでございますか。お母様の御意見ハ？」

「母の？ 母の妻ぢやいなし。我が可ければ別に不服のある理はない。」

「然し一應は兎も角もお相談になッて……。」

「昨夜はや話した。」

「御不服はございませんか。」

「母も喜むでをる。」

「左様なら一つ先方へ話して見ましやう〳〵」

「先方はどうぢやらう。承知をしやうか。」

「此方が二度目といふ所が少々何でございませうけれど。お子様はなし。御姑御様はお一人といふのですから。申分はございませんな。」

「さういふ注文にいつてくるれば可いが。」

何かふと思ひ出したと言ふ發端に。卓子の端をとんと拍つて。

「品行はどうぢやらう？」

「左様。」と洗魚を一臠口へ入れて。もぐ〳〵と何を言ふのやら全然解らず。

「なあ品行は？」と問なほされて。慌てゝ嚥込み。手掌で口角を横摩して。

「其點は私にも解りかねます。一つ糺して見ましやう。」

「何分願ひます。」と奥の方を向いて。「こち酒を持て來んか。」

「はい」といふ聲が聞えて。四十餘の中老女が德利を兩手に持つて來て。空いたのと換へて行く。

澁谷は「熱いのを」と一本を山口の前に置き。自身も一杯注いで。半分ばかりきゆうと飲で。椽續きの隱居所を軒の蒹簾の下から覗込むで。

「御母樣？」と又覗いて。「一寸」と呼べば。六疊の隱居所に新聞を讀でゐた六十五六の剪髮の女隱居が。洋銀緣の目鏡の上からまづ坐敷を透して。やがて目鏡を取つて。新聞紙の文鎭にして。「やッと」と小さな掛聲で立ち上り。腰もしやっきりとして。坐敷へ入つて來て。山口を見ると。

「よう入らつしやいました。」と田舍訛の濁聲で。ぺつたり坐つて時誼を述べる。山口は急に裃をすべり落ち。はつと平伏して。慇懃に挨拶をする。

澁谷は盃に手を懸けて母親を見遣りて。

「一杯どうですか。」

「今は欲うないから又晩に。」

「少々召上りまし。」と山口は自身の盃を干して献さうとする。

「私は晩と極めてをりますから。」と德利を取て。

「まア〳〵貴下最一つ。」といはれて山口は輕く額を壓へ。

「然し先刻から餘程頂戴いたしてをります。」

澁谷は椰子實の煙草入に銀の長煙管を添へて。雪洞を懸けた紫檀の煙草盆を母親の傍へ廻はすと。隱居は背を屈めて膝の上に兩肱を持たせながら。煙管を取つて。すう〳〵と二度ばかり吹いて。煙草を埋めながら。上眼で人を見る癖あり。澁谷の眼の大きくて可恐のは。遺傳と見えて。此隱居の眼にも同じ大さと。同じ可恐があるが。老年に落凹むで奥の方でひか〳〵するだけ。いとゞ可恐も凄くも見える。顏色は日に燒けた澁紙の如く。顴骨高く秀でゝ。顋の先まで痩細り。七十にも近からうといふに髮は濃くして。目に着くほどの白髮もなく。唯老年の悲しさには。天邊が燒原のごとく圓く赤兀に兀げてゐる。齒は貝を含めるやうに揃つて。一枚とても瑕のあるはなく。恐らく衆は入齒と想ふべし。年老の髮の黑いのと。齒の脫けてないのは。いかにも憎體に見えるものなるが。此隱居はそれに最一つ

普通れて。可恐眼といふものを控へたれば。一目して邪慳の氣が人に逼る。

山口は酒を飲みながら頻りに此相を觀て。「あゝ嫁になる身は不便だ。」とつく〳〵思つたが。「幸ひに澁谷は。此隱居の相が表はす如き性質ではなくて。外貌によらぬ實意のある好人物であるから。嫁を世話しやうともいふのだけれど。あの姑は他人の我ながら氣が置けて。何となく薄氣味の好くない人物だ。」と思へば酒もどうやら旨くなくなつて來る。

「御隱居樣にあの御話を。」

「何かい。嫁の？」澁谷は首肯く。

「可からう。少し若いやうに思ふけれど。な山口さん。」

「其所です。」

「何所かな。」と言つて見て。「はゝゝゝゝ」と澁谷は笑ふ。

「なるほど若いやうではございますけれど。女子といふものは老易いものでございますから。」

「私なども去年までは餘程若かうございつたけれど。」

「左樣でございましたな。はゝゝゝ。」「眞箇。ほゝゝゝ。」

隱居はなほ前のごとく屈むで。緩く煙管を持つて。鴈首で疊の目を横に摩りながら。鼻の孔からふうと太い烟を出して。

「私の嫁といふのではございませんから。此人の氣にさへ入つたら。私は構ひません。」

「なるほど。」

「士族であうましたな。」と上眼で見る。

「たしかに士族で。手前と同藩のもので。」

「小身ですか。」

「私は交際たことがございませんから。詳しくは存じませんが。」

「まゝ小身でも士族なら……。平民は不可。」と憎々しく顰面をして首を掉る。

「何故な？」と澁谷が笑ひながらいふと。怪しからむ事を聞くとばかりの腹立顔で。

「私は好かん。平民なんぞは。」

「今は士族も平民も無いです。」

「否。有る。」といよ〳〵腹立つて。

「貴下が平民の娘なんぞを嫁にしたら。私が先祖へ申譯が立たん。」と火の樣になる。餘り腹を立たしたら此話が○にならうか。と山口は案じて。

「それは何と申しても士族の事でございます。」と隱居

の意を迎へると。

「何といふても然でござるよ。」と庭を向いて煙草を吹く。これで坐が白けて。いづれも少時無言なり。

「山口さん。兎も角も先方へ相談をして見て下さらんか。」

「承知いたしました。」と盃の底にある酒を干して。

「大分頂戴いたしました。」

「ゆうあ」と澁谷は德利を向けると。其頸をおさへて。

「否。もうどうも。」

「何のあればかり。」と無理に注げば。山口は盃に盈るのを見がら。「どうもう是は。」などゝ呟いてゐる。

隱居は勃然として。ふか〳〵煙草ばかり燻らして居たが。急に吹殼を擲いて。

「山口さん。それぢや何分お頼み申しまする。緩りとお上んなさい。まだ戸外は暑うござる。」と言捨てゝ隱居所へ入る。後を見送つた山口は聲を低めて。

「御隱居樣は御立腹ぢやございませんか。」

「なあに。いつもの癖だ。」

「左樣でございますか。」と山口は隱居所を見込む。

（五）

やゝ煤けたのは去年から持越。といふ岐阜堤灯を。出窓の格子の中に釣して。燈は其ばかりの三疊の薄くらがりに。蚊を拂ふ團扇の音を絶間なく立てゝ。姉妹二人行水後の浴衣姿で。肩と肩と相摩ふほどに密着いてゐる。

平生に異りてお銀は一向に冴えぬ顏色。窓外の方を眺めて。團扇の柄で膝を小刻みに敲いてゐる。

お鐵は姉の顏を不思議さうに多時見込むでゐたが。小聲に「姉さん」と呼べど。返事なければ。手を把つて

「姉さんてば。」

「えゝ。」と振向く。

「そんなに考へなくつても可いぢやないか。」

「何も考へはしないよ。」

「考へてるよ。先刻から。」

推返して然ではないとも言はず。然だとも言はず。お鐵の顏を懼乎注視ながら又考へてゐる。お鐵は少し焦れ氣味で。

「姉さんてば。」と力を入れて呼ぶと。

「あいよゥ。」と「よゥ」を長く引張る。

「否だ。私は。」
「なぜ？」と平氣。
「お目出たいのに那麼にお鬱ぎでないよ。」
「否な子だよ。」とお鐵の肩を輕く拍て。眼中には嬉しさうな色も見える。
此嬉しさうな色を見て取るお鐵の眼中には。その「嬉しさうな」を嘲るやうな色が見えて。「お目出たいのに。」と繰返せば。「否な。」とお銀の方でも繰返す。
「何日適くの？」
「何處へ？」
「お目出たい所へさ。」と姉の膝を一寸突く。
「否な。」と内向いて。
「眞箇に冗談は退けて。何日に極つたの？」
「何がさ。」と手強く不知をきると。
「否だあ。」と甘垂れたやうに言ふ。
「否だあッて。何の事だか些も解りやしないやね。」
と怺へやうとするほど。喜色は却つて眼中で舞を跳る。
「そんなら可いよ。」と少し激して。お鐵はわざと横を向く。
お銀は眼中の微笑を滿面に廣げて「鐵ちやん！」と呼べど無言。「鐵ちやん！」いよ〳〵無言！ます〳〵横を向いて。竟にはくるりと背を向ける。お銀は二本指でお鐵の背筋をむづ〳〵やると。「あれ」と身を顫はせて。「知らないよ。」と後樣に拂ふ手を。透さず掴むで。片手を肩に懸けて。ぐつと力を入れて此方を向かせる。
「知らないよ。」とぷり〳〵するのをお銀は面白半分嚴請半分。
「さうお怒りなさるもんぢやございませんよ。」
とぬつと手を出してお鐵の頤の下を擽る。頸を縮めて。怒りたいにも可笑くて怒られず。仕方なしに揉潰したやうに笑ひながら。お銀の手を振拂つて。
「否。もう姉さんは。」と顔を見てゐて。
「もうお嫁入をして。居なくなると思つて。妄に他を虐めるよ。」
「お目出たいの。お嫁入だの。とおいひだけれど。未だ決定はしないんだよ。そんな事は。」
「決定らないから心配して鬱ぐの？」
「ぢれむま」の角に懸けやうでもなく。何氣なしの言葉が。嚴しくお銀の感情を突いたか。流盼をして。「否な。」と苦々しく刻返せば。
「だつて鬱いでるぢやないか。」となほ執念問窮める。

「鬱ぎはしないよ。」と叱るやうに説破する。
「さう？」と眞面目に。おとなしく聞流して。後は双方無言。
奥には今戸燒の蚊遣猪に。炭俵の口の刻むだのと陳皮とを燻して。その煙を呉服屋の暑物團扇で女房が扇ぐ傍に。新八郎は洗晒した阿波縮の浴衣に。窠ぼけ色の淺黄めりんすの三尺を前結びにして。鹽漬の古茄子ほど平坦となつた木綿更紗の蒲座團に。藻に鯉の印附の。即効紙のやうな色をした擬油團を上敷にして。胡座を掻き。座敷の眞中に釣した小洋燈の火を借りて。赤くなつた野代の膳を控へて。鰺の鹽燒が二尾と。生乾の雷干で。泡盛をきこしめしてゐると。手水鉢の上に釣てある玻璃細工の風鈴が。無性にチリン〳〵チンチリンと鳴る。
「おゝ好涼風だ。」と女房がいへば。新八郎も「豪氣だ。」と和して。向脛に來た蚊をぱんと撲つて。
「然し。申分はない誠に結構な口さ。」
「でも二度目といふのに。年齢がちつと違ひますから。」と女房は幾分か二の足の語氣なり。
「年齢が違ふつて。幾許違ふものか。三十六だと？」
「さうでございます。」
「十九で二九の十八と。倍は違ひはしない。」
「可哀さうに倍違つて堪るものですかね。其も初婚ならまだ何ですけれど。」
「女子とは違ふ。男子の事だ。初婚でなくつたつて。嬰孩がないから仕合せさ。」
「二度目で。嬰孩があつて。姑があつて。加之叔父ほど年齢が違つたら。第一相談にはなりませんわね。」
「といふがの。今時の娘はなか〳〵那麼事を言つてはゐないよ。髪の出來が氣に入らないといつて。飯も食はずに一日泣潰したなどゝいふ。お前の娘時代とは全然了簡が別だといふ事さ。』
「いくら利口のやうでも。やつぱり十九や廿歳の處女でございますよ。阿郎不斷の擧動を御覽なさいな。まるで孩嬰ぢやございませんか。」
「然でないつて事さ。」と德利を持つと。何時輕くなつて。ちよろ〳〵と猪口に半分ばかり。倒にして。ぱたり〳〵と滴らして。情なさゝうな貌を。女房は横を向いて見ぬ風でゐる。
「もう少し。」と思ひ切つて德利を出す。
「過ぎますよ。また明日の事になさいまし。」
「お銀は子供でもいゝが。乃公まで子供扱にするな。

もう少しだ。」

「召上るのは可うございますけれど。今夜は彼子の事で相談をしなければならないんですから。お控なさいましよ。また過ると。相談も何も出來やしませんわね。」

「道理だよ。醉てしまつて相談が出來んと思へば。控へろとも言ひたからう。けれど前祝と思つて。少し。眞のすこゥしだ。これッばかり……。」

と德利の底を五分ほど指で畫つて見せて。

「また後を引くと思ふと。止めたからうが。決して後を引くのではないよ。前祝だ。前祝と思へば。憎くはなからう。前言ふ通り前祝に飲むので。醉はうなぞと思つて飲むのではない。決して〳〵。いかな事があつても醉はない。あゝ醉はない。醉た日には第一前祝に對しても濟まん理だ。別に斷つて飲みたくもないけれど。眞の前祝に飲むのだから。」

「飲みたくないものなら。浪費な事ですから。なほの事お舍諸なさいまし。」

「そんな皮肉はいひつこなし。後生だから持つて來てくれ。もう猪口に二三盃も飲まして見ろ。いよ〳〵相談が捗どる。といふのは。實は此所等に。」と鳩尾の下を壓して。「好分別や文珠の智惠なんぞが雜然小さくなつて窘むでゐるのだ。之を迎ひに行かなければ出て來ない。迎ひには誰が可からうといふと。それ酒だ。之を迎ひ酒といふ。」

と眞面目にやられて女房も可笑くなり。仕方なしのくすゝ笑ひ。溢々臺所へ行き。現金に少しばかり注いで來て。德利を膳の上に。印でも捺すやうに。ぢかと置きながら。新入の顏を覗いて。

「もう是限ですよ。」

「今度は狆扱ひだ。餘のはお預けかね。」とにたゝ〳〵笑ひながら德利を持つて。餘り輕いのに驚いて思はず

「ほい。」と聲を懸けて。少時考へたが。

「怪しからん。酒だと思つたら。此中に子供を入れて來たな。」

「また冗談ぢやありませんよ。早く吃るなら吃つて了つて。相談を決めませうよ。」

「いや何でも子供が入つてゐる。」

「なぜで御座いますよ。」と希有な顏をする。

「なぜでも可いから。一寸振つて見な。」

女房は何の氣も着かず振つて見る。

「そら。そら。ぽッちゃん〳〵。」

「えゝもう酒落所ぢやありません。」と茶漬茶椀の糸底に載せた猪口に溢れるほど注ぎ。早く形附けやうといふ下心から。飯櫃を擔出して側に引着け。胴中を撫て見たり。蓋をこと〳〵と。指頭で責皷を鳴して。短兵急に押寄せたりしても。一向落城の樣子が見えぬに飽倦むで。最後の策は。蓋を取つて。杓子を入れて。飯を揑返して。誰か實のある人は一膳食べてくれさうなものだ。と謂はぬばかりにして見せる。其時亭主は少しも騷かず。悠然自若として傍に飯なきが如く。ちびり〳〵と旨さうに。飲むといふよりは寧ろ舐めて樂むでゐる。舐めても顯いでも。もと〳〵三四杯の酒は。竟に一憂も殘らぬまでに飲盡して。虛になつた德利を名殘惜しげに膳から下して。やうやく不承々々に茶椀を取上げると。かねて期したる女房は。一番槍と呼ばゝらぬばかりの勢で。茶碗を奪取て飯を盛りつける。

新八大とろんこの眼色になつて。箸どりの摸樣なども餘程覺束なく。此分では食事が濟み次第。前後不覺の高鼾と女房が察して。今の內に相談を志かける。

「ぢやあ阿郎の御了簡は。お銀を嫁らうといふのですか。」

「大やりさ。お前の考へはどうだ？」

女房は默つて飯櫃に縋つてゐる。

「嫁るに決めなさい。大した結構の口だ。まづ大磯の方に二千圓ほどの地面があつて。さ。よしか。地坪が二百三十坪で。建坪百坪といふ居宅が。自分の家作で。婢女が二人に書生が一人。お抱へ車で車夫が一人さ。奥には六十五になる姑が唯一人で。當人は奏任の百圓といふ身分で。よしかい。實意があつて。優しいといふのだから。此上の望蜀はありやしない。年齢も。二度目も。要つた理のものぢやない。」

「それはもう結構は知れてゐますけれど。適く身にもなつてごらんなさいましな。妾にでもなるのぢやなし。ちつとやそつとは註文もありましやうわね。」

「註文があるならして見なな。どらほどの註文か知らないけれど。註文通りより餘程上出來だと我は思つてゐる。十三圓の官員樣の娘に奏任の婿は。註文より過ぎてやうぢやないか。慾をいつたら際限がない。實は我も最一杯飲みたいのだけれど。かうやつて控へてゐる。お前も控へて諾と我慢をするが可い。」

といかにも睡むさうな顏を「べろん」して。遂にばたりと横になる。今仆れたかと思ふ間に。すや〳〵と寐入

る。酒は是だから可厭だといふ顔で。女房は膳を片寄せ。直と夫の傍に寄て。肩頭を搖動りながら。

「阿郎々々。お風を引きますよ。阿郎。」

「うゝ。う。」といふ聲に。手を退けば。一向多愛なく又寐入る。

「お銀や。お鐵や。」と呼べば。二人はばた〳〵と馳けて來る。

「此所を形附けておくれ。」

「おや大層な鼾だこと。」「ほゝゝゝ。」と姉妹は手分をして膳を引く。流元に手洋燈を點ける。跡を掃く。茶碗を洗ふ。揚板を踏む。がら〳〵。ばたすたと騷々しい中で。新八は心持好さゝうに熟睡して。折々顔に來る蚊を現で撲く。女房は頻りに搖動かして「もし」と「阿郎」の二三十唱へてもお通じ無しゆゑ。頸に手を懸けて。うんと引起こせば。有繋に少し正氣付いて。

「何だ〳〵。」と寐惚聲を出す。

「さあお起きなさいよ。先刻の相談はどうするのでございますよ。」

「蠅帳へでも入れて置け。むにや〳〵〳〵。」

之を聞くと。臺所では姉妹が腹を抱へて。きやつ〳〵と笑ふ。女房も持餘して。手を放せば。又ころりと寐て。足をばたん。

（十八）

子を見ること親に如かずといへど。子を見損ずるも親に如かず。女親はお銀の容色をば。たしかに實價の五倍も買ひ冠つてゐて。お銀ほど美しいものは世間に二人とは無いものゝやうに想つてゐる。

これまでに數度の緣談も。母親が主唱に立つて毛嫌ひをして。彼でもない此でもないと皆壞した。といふのも。畢竟お銀を寶にし過ぎて。慾を乾かしたからではあるが。また一概に慾ばかりとも謂はれぬ。女親の身にもなつて見たら。いかさま十九年來の丹精。一葉から培養に懸け。雨に風に心を傷めて。やう〳〵花の咲くまでに仕立てたものを。むざと手放すは。いかにも口惜しからう。世話の燒けるまでは散々世話を燒かされて。これから手助にも相談對手にもならうといふ頃に。ふいと持て行かれては無念なるべし。又一面は。可愛くて〳〵片時も傍を離しかねるといふが。母親が毛嫌の原因でもあつたらしい。けれども慾の方が勝てゐたには相違ない。さて女親の理想の婿といふのは？まづ今度の話しほどの身拵で。舅姑が無くて。年齢が

二十五六で。容貌の好。性質の優しい。自分等夫婦を親のやうに大事にしてくれる。ぐらゐの男なれば。澁谷に就ては未だ二三條の不服がある。男親の方はさほど不當な思想は持たぬ。娘の價値を稍正しく知つて。此上も無い福ゆゑ。どうか纏めて。早く安心がしたいといふのを。女親の眼から見ると。何も我子を然う卑く見て。損物の強賣でもするやうに。急促て手放したからなくても可さいうなものだが。男親といふものは。實に女の子には情の薄いものだ。と其とは言はねど。心中には恨めしく思つてはゐるものゝ。此緣談が頭から不服でもなく。さればとて。二つ返事といふほどでもなし。

昨夜は一晩ゆつくりともせずに考へ明して。今朝になつて見た所が。別に決心が出來たわけでもなし。隨分嫁つても可い。父親も承知。當人も承知ならば。嫁つても可いやうなものではあるが。唯「二度目」といふのが氣になつてならぬ。尤も二度目といつた所が。新婚といつた所が。二度目だから女房を疎末にする。新婚だから大事にするといふ理もなし。仕立おろしの衣服でも。一度着たのでも。着心に格別の異はなし。と思案をして見れば。勘辨もなるけれども。同じ嫁るものなら。外に口が無いではなし。嫁る所に事を缺いて。二度目の所を撰るといふのも馬鹿々々しい。これが此方も二度目といふのなら當然であるけれど。何にしろ初婚で。年齢は十九で。容色が優れて美と來てゐるのだから。それに何も醉興な。二度目の所へ嫁るにも當らない。斷然嫁るまいかしらぬ？

兎も角も夫が退省てからの相談と。煙草盆を引寄て。すぱり〳〵と嘘しながら。懼然母親は沈思てゐる。姉妹は彼三疊に人氣無きが如く寂然閑と繼物をしてゐる。やがて新八郎は朴齒の下駄を曳きずつて。疾歩に歸つて來る。猪口を捺したやうな五紋の紗の羽織の。どう疊むでも。鎭を置いても。自躰絲が性を失つて。揉めたら些伸びにくい皺が。最多く裾の邊に髣髴たるを。特更に折目正しく着做したるが。一心に道を急いだ所爲か。四分五厘ほど抛衣紋になつて。然のみならず背縫が二十三度ばかりも曲つて。御紋の上り藤が風に吹かれてゐる。いつそ煤けたなりに委いたら可いものを。山梔子色に色揚をした麥藁帽子を。子細らしく入口で脱いで。右手に小さく握つた手拭で。額際の汗から。ぽつ〳〵と湯氣の立つ頭顱まで。一刷毛に拭き〳〵。顏を顰めて「熱いわ〳〵」といふ掛聲で入れば。姉は

帽子を請取って。奥の承塵の折釘に懸ける。妹は粉の散る白章の朴齒を下駄箱に形附ける。鼻に皺を寄せて又「熱い〳〵」と呻りながら。眞裸體になると。お銀は透かさず濡手拭を持つて來て。背を拭けば。老者は「げい〳〵」と二つ三つ。いかにも胸が開いたらしさうに凄まじい曖氣を放つ。お鐵は藍地に紺万筋の嘉平治も。今は寄る年涙の法躰で何齋といひさうな袴を。最も鄭重に疊むで。簞笥に納めてから。辨當の包を解いて。鐵葉細工の漆髹を取出し。梅干の核を水口へ捨てに行くと。狆面の額白の隻眼の黒毛牝犬が。變に鼻を鳴らして。今にも千切れるほどに尾を掉てゐるのを。叱々と追ひまくつて。やがて辨當箱を洗ひに懸かる。お銀は父親の御所望とあつて。飯糊の一袋を餘さず摺込むだかとも想はれる。ぐわ〳〵した白地の浴衣を着せる。宛然輕燒を背負たやうだ。と哄と惡路が來さうなり。」姉妹はかの相談が始りさうな氣色を見て。揃つて次へ遠慮して。針を持つと。

「どうだ？いよ〳〵嫁るに決めたか。」と父親の聲。お鐵は之を聞いて。姉はどういふ顔をしてゐるだらうと見れば。下を向いて。わざと一心に針を動かしてゐる。

凡そ小一時間ほども相談が有つてから。

「お銀や。一寸。」と母樣の呼ぶ聲。聞くとお銀は針を停めて。午後四時ばかりなる縹色絹を膝から推下して立起る處を。お鐵がわざと徐と顔をば見上げると。澄まして。すうと立つて二三歩行きかけたが。彼事だなと思ふ心があれば。何となく改まつたやうな。氣羞かしいやうな。恐いやうな。異な氣持がして。赫と顔が熱くなつて。胸が轟いて。足が窘む。母親を少し離れて。父親を遠く離れて。風入の好さゝうな。誂のむづかしい所に陣取つて。兩親の顔色を忍びやかに覗ふ樣子はいかにも。不氣味らしい。遠慮があるらしい。麁想した下女が譴責を吃ひに呼出された。と云ふ風情に似てゐる。

母親威儀を正し。と云ふ態度で。

「お銀。」と頗る嚴格に口を切ると。改まつて出られた言葉に釣込まれて。

「はい。」とお銀も改まる。

「概略は昨日の談話で聞たらうけれど。お前ももう妙齡だし。いつまでも家に居る譯にはいかない身分だし。幸ひ實に似合はしい緣があるから。取極めやうかと思つて……。」

「やうかと思ふぢやない。取極めるのだ。」と横鎗を入れられて。

「まあ阿那。」と女房は懊惱さうな貌を夫に向けて。やがてお銀の方を見向いて。

「先方は二度目ぢやあるけれど……。」

と言ひ懸けると。父親が突然に！

「これ。直に二度目々々といふよ。」と竹箆返しの恐い眼をする。

「でも貴方……。」

「えゝ！」と睨みつけて。「おれが話説をする。銀。何だ。その先方は小石川水道町でな……。」

「あれ貴方。小日向水道町でございますよ。」

「町所ぐらゐは如何でも可いわな。喧ましい。」と顔を顰めて。「小日向水道町で。澁谷周三といふ人物だ。奏任四等の上月俸といふから百圓の月給で。なかなか評判の好い有用人物ださうだ。住居は自分の家作で。下女部屋。車夫部屋。書生部屋。湯殿がある。物置がある。何のかのと云つて。間數が九間もあらうといふのだ。表の榊形の門から玄關まで十間もあつて。庭なぞは宏々として。立派な物ださうだ。それで六十五になる女隱居樣が唯一人で。小姑も何も無しで。當人といふのは三十六になつて。大肥した長の高い……。

「お前お見だらう。此間お邸の御宴會の時に。見たはずだよ。」と母親が言ふ。

昨日橋わたしに來た男は。其晩醉つて喋つた山口といふ人。いかにも見覺えてゐる。其人の話を聞いた時に欲しいといふ人も察した。おぼろ氣に名も覺えて居るが。見たとは。どうやら鐵面しくて言惡い。まんざら見ないとも亦言惡いのは。山口が來た時挨拶に出て。先晩はなぞゝ言はれた事もある。そこで。

「よく知りません。」と「よく」の字を冠せて跡を晦ます。深く斬込む必用も無い所から。

「さうかい。」と長追もせずに母親も手を退く。

入代つて父親が咳拂ひを一つして。

「あゝ見なかつたか。肥た長の高い。誠に男らしい立派な人品だとよ。」

「立派な人品だとよ。」とはお銀も少し可笑かつた。

「それに姑は始終隱居所にばかり引籠むでゐて。三度御飯を食べる時の外は。一切座敷へ出て來る事なしで。主人は朝八時から出勤で。四時頃歸つて來る。其間は用なしだ。用があつた所が。下女が二人ゐる

から。奥樣は用無しで。晩に一杯飲む肴の見繕ひぐらゐが役目だといふ。どうだ。女子は十九が厄年といふが。お前は。去年劇く流行性感冒をやつたから。前厄で厄拂をして了つたから。今年が大當なのだ。どうだ。」

（七）

父親は獨り悦に入て欣々然と話すに引換へて。難有くもないといふ顏色で。「二度目」といふ事を忘たのか。わざと言はぬのか。何にも爲よ言はいで措かうか。と唇を蠕々させて。夫の言語の斷れるのを待構へてゐた母親は。

「唯お前もどうだかと思ふのはね……。」

「俺が今に言つて聞かせるわな。」と壓潰すやうに言はれて。

「早く話してお遣んなさいましな。」

父親の心になつて見れば。勿論「二度目」の事も言つて聞かせる氣なれど。もし之を言出したらば。お銀が二の足を踐むかも知れぬ。そんな物を踐れたら此御父親大凹と躊躇してゐるのを。女房か「二度目」といふのを讐敵のやうに氣にして。跟けつ廻しつやい〳〵言ふゆゑ。もしやお銀が悪く取つて。何か可厭事のあるのを裏むのではあるまいかと氣味を悪がつて。談が破れるやうなことでもあつては大變と。言つて聞かせるに決心して。

「子供等があるわけではないが。實はその澁谷といふ人は前妻があつたので。二年前に亡くなつたのださうだ。二度目の家へ此方が年齢が若くて初婚で適くといふのが少し氣にも入るまいけれど。さうでもなければ大分格の違ふ今度の話のやうな家へは。我家あたりからは適けるものぢやない。二度目といふのも子供でもあるのなら隨分思案ものだが。そんな面倒はないのだから。知りさへしなけりや初婚も同じ事だ。男子は三十五六で初婚のものは許多ある。初婚と思へば初婚で濟む事だらう。女子と違つて男子は二度目が三度目でも。那樣事は少しも環にはならない。

お銀は話說の始終顏を下げて一面は聞き一面は分別。万更否でもなけれど。「二度目」といふのが。女氣には異る事なく母親と同感で。咄嗟の間に挨拶をしかねて忸怩してゐる。

「どうだえ。」と母親に促かれて胸は悸々。徐に顏を

擡げて。まづ父親の眼色を見て。母親の顏を窺つて。また首を垂れて默然。

此處で「否」ときつぱり斷つたら御父樣が怒る。又自分にもきつぱり「否」といふほど否でもなし。さうかといつて否とも應ともいはなかつたら父親が癇癪を發す。母親の樣子を見るのに父親ほど乘てはゐないらしいから。兎も角も母親を味方に賴むで。好やうにしてもらはうと。

「私はどうでも御父樣と御母樣さへよければ……。」

と言ふを速や遲し。新八郎は衝と乘出して。

「御父樣は善いとも〳〵大贊成だ。お前はどうだ。」

と女房を見向けば。

「さうですね。」と娘の顏を見る。

「そんな生返事をするな。きつかりした所をいへ。きつかりした所を。」と齒痒さうに言ふ。

「私は宜うございますあね。貴方さへ宜くば」

「えゝ。他人がましい事を言ふな。貴方も此方も要るものか。胸を聞くのだ。お前の胸をよ。」

「私は宜うございますけれども。當人が肝心ですから兩親ばかりが善いといつても……。」

「それだからよ。それだから當人も今御父樣御母樣が善いならと……。」

「言つたからつて信にはなりませんわね。」

父親は頰を脹らして。

「何。信にならぬ事があるものか。」

「でも然うはいきませんよ。まあ今日は彼にとつくり考へさせて。而して私が明日すつかり胸を聞いて見ませうから。」

かういふ事は表立つて聞いては實を吐かねもの。と自身の舊時にも經驗のある母親の調和に。一時の壓服は後來の風波の基と。悍切つた父親も一歩を讓つて其意に從ひ。「それぢや彼方へ行つて善く考へて見な。」

嫁入は女子一生の大事なり。可否かは風邪氣の時に浴の分別をするとは大きに寸法が違へば。お銀は頗る案じ煩つて。二疊に還て再び針を把つては見たものゝ。悵然として溜息ばかり吐いてゐる。胸の中では。どうせう。御父樣もいふ通り先方の身分には實に申分はない。玉の輿だと世間はいふだらう。媒妁人の山口はお邸の祝宴の時お金さんに私を呼ばせて酌をしろといつた人だ。澁谷といふ人は。なるほど右隣の柱に凭れてゐた太つた。色の黑い。眼の可恐い。髮の縮れた。口髭のもや〳〵と生へた。あゝいふ風だから更けては見

えるけれど。三十五六？那樣ものだらう。私が十九で先方が三十五六。大分違ふけれど女子は更け易いから直に丁度好くなる。最少し若いと好いけれど。三十一二……二十七八……五六なら何も申分はないけれどさう。又若くつては些の書生上りで。自分の力であれほどの身分になれやう譯もなし。年齢の所はどうにも我慢は出來るとして。それから男振だが。役者や藝人ではないのだから。男振なんぞはどうでも可いやうなものだけれど。又然うもいかない。醜いにも次第がある。同じ醜いながら何所となく愛嬌のあるのがよく有るものだが。那樣のならまあ〳〵可として不承もするけれど。どう考へても彼人の目が可厭だ何だか腹の黒さうな。えゝ誰かに似てゐるよ。えゝと誰かに……然矣山王樣のお祭禮の時醉拂つて佩劍を揮舞はした兵隊の眼色に宛然！本當に可厭眼色だつちやありやしない。媒妁人は。實意のある。優しいことゝ云つたら外貌に據らない男だといふけれど。媒妁人だもの何だか分りやしない。あんな眼色の人に限つて。邪慳で執念强くて。薄情でやかましやで。氣心の知れないまんねりむつゝりが多いものだ。そんな人に添ふ事は否々。一月か二月なら機嫌も取れやうけれど。これから一生涯……あゝ恩出しても肩が凝るやうだ。けれども人は眉目より心といふから何でも心が肝心だ。容貌はまあ彼でも可としてどうだらう。心が？それがさ。邪慳で薄情でやかましやで……とは想ふけれど。蟲も殺さないやうな顏をしてゐて隨分邪慳な人もあるし。地主樣の隱居樣見たやうに赤鬼のやうな貌をしてゐながら慈悲深い人もある。さうして見れば彼人だつて優しいかも知れない。容貌は當座の花で夫婦は相互の氣心といふから。生白い人形のやうな亭主を持つた所が。それが永久どうといふではなし。あゝ容貌の事なんぞはもう〳〵考へまい。考へまい！

それから二度目の事だ。之が第一氣に入らない。二度目だから如何といふ事もないけれど。何だか他人のお古を引請けるのは可厭だ。先方は甚麼好い家か知らないけれど。此方は十九の嫁入盛で初婚で。年齢の更けた二度目の所へ嫁くのはつまらない。それも此方が疵物で他に娶ひての無といふのなら爲方もないけれど。娶ひては世間に許多もある。それぢや二度目がどういふ理で可厭なのだといはれて見ると。かういふ理だと返答も出來ないけれど。誰だつて二度目は可厭だ。一寸譬へて見ると。古衣を買つて仕立直して着よりは。

同じ直段なら誰しも新しいものを買ふ。古衣の方が品が良くても新しい方が着心が好いわけだ。どう考へても二度目は氣に入らない。否だと言はうか知らん？否に決めやうと思へば扨又眷戀として棄つるに忍びざる處もある。月給が百圓。家作が有つて。地面を持つて。中の上。上の下といふ生計。這麽唐縮緬のくちや〳〵帶をしてゐる丸橋の娘銀が忽ち奏任官の奥樣！なりたい。否どころではない。願つたり協つたりだ。男振が好いの年が若いのといふのは些の當座の事だ。當座より行末を考へなければならない。末の事を思へば此上もない良緣だ。と奥の手に悟入して見れば。なるほど父親の喜ぶ胸中も全然讀めたといふわけ。そんならいよ〳〵適くに決めたかといへば。色氣も大有。未練も大有で。せめて並むで行いても可慙しくないくらゐの容貌の男にしたい。那ではどうもと。復分別が立戻る。

胸一つに置きかねて妹に相談をしかけると。まづ「あの人かい」と黒蚯を撮む時のやうな顏をされて。妹に對しても彼を我夫はちと可慙か敷。舍さうかとも思つて見る。否々よく〳〵本當によく〳〵〳〵考へて見ると。依然適く方が可い。私でさへ容貌の事を左う右思ふのだも。年齒の長かない鐵がさう思ふのは無理もない。行末を考へて見れば那樣事を言つちやゐられない。もう誰が何と言つても適かう〳〵。

（中の巻）

（一）

若き女子は箸の轉けたも可笑く。笑ひ興ずる心の中にも仍苦勞は絶えずして。老けぬ間に緣附きたや。好婿取りたや。世帶特つとも苦勞なきやうにと。金持も容色美もいづれか身のをさまりを案じて。朝暮の憂慮とせざるはなし。思へば女子の身は夏の牡丹餅のごとし。饐易くして賣れ難し。之を抱ふる心配は實にさもあるべし。

緣は出雲の神の思召すまゝとかや。容色の美醜に由らず。身代の貧富に拘らず。持參が二萬圓お臺所をも持ち。御齡十九にまし〳〵て容顏美麗なる姫君の。二年良媒をもとめて今に几帳の陰に物思はせたまふもあれば。味噌漉に五厘が剝肉買に行姿のかい〳〵しきを。至極の世話女房と見立てゝ望めば。綿錦仙の禮服にて車にも乘らざる輿入に埒明くもあれば。緣は抽籤の當

の知れざるに。世間の娘身を案じ親の髪白くなりて。昨日今日空に過行くを手を空うして。氣のみは苛てど所爲なく。横町の鰹節屋に河豚のやうなる嫁の來たるさへ恨まれけり。

此國の人口男子一人に女子百人といふ比例にもあらざれば。何のかのと案ずる間に吉事の劍鋒向きて。闘ちざる方より持込む縁談は上々吉。願ふ所と家内愁眉を開き。前祝の鰻飯嫌ひなものは餡鍋と。食過ぎてか寢られぬほどの歡喜。鏡臺は何所で見て置いた。簞笥の扉附は今行らず。長持は邪魔もの。用に立つは用心籠なれど。彼も道具の花なれば。と深夜を知ぬ寢物語。傍に娘は寢たる風して後來の取越苦勞。其中に小袖の染色。摸樣の工夫も挿みて。嬉しさ。心元無さ。打混じて一塊となり。氣遣しさ。樂しさ。我と我心を持餘すべし。

げて。婿殿の萬事を察して。支度金百圓結納の目錄に粹なる取添へ。帶代として贈り來しければ。甘露庭の落葉に降りたるばかり兩親膽を潰して有難がり。さあ何でも買へと奮みあがれば。所望の品を殖してお銀の嘆願。其も是も一諾に承けこみ。思ふまゝなる支度出來て。約定の日を遲しと待つのみ。

嫉妬深き近所の誰彼目を側め。聞耳清して。分外なる方へ適くさへ合點のならざるに。聞けば支度金まで出たるよし。容色美くても然ほどの代物にもあらざれば。淮妻淮妻。其に極まれり。日比は鐵橋を舟で渡るやうな嚴格な言ばかりいうて居ても。其は榮曜と云ふもう〳〵それは〳〵尊い有難い神樣から。運といふお使ひ來ぬ前の瘠我慢なり。早くお銀樣の三輪か束髪に結うて。大方旦那のお召古しを土産にして。歸寧の美しき姿が見たしと囁き合ひけるを。お鐵が聞きつけて口惜と母樣に告ぐれば。腹立てゝまた之を父親に語りぬ。「新八郎は獨り打笑ひ。捨てゝ置け。法界悋氣の仇なき長家者。陰にては大臣の事も彼此いひくさる人の口なり。そのやうな言吐す日償貸のお爪が娘は。下水浚の蔦の彌助と腐り合ひ。金錢まで攫出して新網に遁げ。今はさながら乞食の境涯。また合羽屋の女房めは我娘を茶屋奉公に出して。三十に足を懸けたる身に亭主も持たせず。淫樂の應報は此頃頸に吹出て病院入の不始末。他事よりは銘々の事を攜ふべき身の猜忌と思ば。腹立つ處か不便といふべし。妬まるゝほどの銀の出世は目出度々々と取合ざれば。なる程と會得して。其後は又もや嫁入の障礙ともならむ根も無き取沙汰を虞

れ。ふつとお銀を戸外へ出さず。首尾よく荷物も送りすまして。吉日もいよ〳〵二三日に迫れば。親類へ暇乞の次手。小癪に障る近所を廻るは快からねど。祝うてくれたるものを捨も置かれず挨拶に行けば。陰言とは雲泥なる輕薄たら〳〵。お銀様に感れと小娘引出して挨拶させし。悪口の頭領株小間物の「じやらくら」女房はいよ〳〵憎くこそ。

前日には例規の立振舞とて。一升炊の赤飯に家内の盃事。父親は目出たい〳〵と口にはいへど。常に酒に對ふほどの元氣は無くて萎れたる顔色。母は睨くも涙を浮べて。今日ばかり物懐かしげにお銀の顔をのみ眺れば。庭に栃の落葉する風も哀を誘ふ心地して。お鐵もしみ〳〵悲しく覺えぬ。

お銀は淑に盃を納め。これまでは長々お世話になりましたと。後はいはず俯むけば。母は堪へかねて涙を流す。父親は鼻蹙にて。凡女子の身一たび人に嫁がば。生て其家を出でむと思ふなかれといへり。他人の中へ出づるからは。むづかしからでも兩親の手許にある時とは。大分了簡を違へねばならぬ事なり。今改めて一一いふまではなけれど。第一夫を大切にし。姑をやさしくし。奉公人を憐れみ。他人には信を以て交はるべし。

我等もさま〳〵苦勞して育てあげたる効ありて。此度は仕合の出世。家の面目。此上は無き兩親の滿足なり年寄れるものに苦勞懸けまじきやう心して。夫の氣に稱ひ。姑の機嫌損ぜぬやう。隨分油斷なく仕ふべし。尚又女房は内を治むる大役にして。家の榮ゆるも衰ふるも女房の所爲唯一なれば。華美を好ます。冗費を慎む事肝要なり。人情は咽喉元過ぐれば熱を忘れ。苦しかりし時は憶はで。在る時の心奢り易きは身上の大毒なれば。其方も些少なる官員の娘の今日を。奥様になりすましての後も努々忘るまじきぞ。

周三の妻。過失あらば夫がいふべし。我娘と思うての意見も此限なれば。疎略には聞くまいと。此時い父も涙を催しけり。

我娘と思うての意見も此限りとの言葉を。何と聞きたるか母い悲哀を強め。餘りの名殘惜さに更に酒盃を取擧げ。今一盃其方の飲みさしを母がもらはんとは。其子に知られぬ親の情。こぼるゝほどお鐵が酌すれば。多しとお銀のいへるに母様の餘に私がと。一盃の酒に親子三人の涙を酌交して。納を父親に献し。姉はお鐵の手を執りて。我跡にては二人分親人を大事にして。

嫁入りては澁谷

世話焼けぬやうおとなしう仕へよ。お前も身を厭うて病はぬやうになどゝ。別れては長く會れぬか何ぞのやうに心細げなる事いうて。後は涙に濕りがちなるを。何時までも壺きじと。父親醉に紛らして小聲に謠を始むれば。其顏が可笑きとて眞先にお鐵が笑ひ出せば。いづれも笑顏は雨後の月。これぞ末吉やれ目出たし。

（二）

先方は財産家の何不足も無く。隱居樣は長持の底より白無垢の下着を出して。帶も名ある織物。今日はかゝり息子の嫁取と。一際あらたまりたる服裝にて控へらるゝ坐敷へ。我等の嫁の兩親顏して罷出づべき衣裳の用意あるべきにあらず。願くは次間にて御免を蒙りたき仕義なれど。此も禮なれば是非に及ばず。膳に列ぶ段になれば父親嘉平次の袴にてもならず。母親柳條の小袖にても濟し難し。さりとて知人に借るべき方はなし。また世間に知れて陰言の種となるも愁けれど。娘の肩身を狹くせむには替へられじと。かゝる時の重寶は裏の路次の口に。差配の質屋が損料貸するを幸ひに。父親一走り行きて恥辱を話し。家の定紋下り藤をつけたる女小袖御坐るかと問へば。縹色裏の小紋縮緬二枚襲を持ち合はせたりといふ。

染色も質素にて間に合ふは仕合なり。次に黑の同じ紋附の男物はと尋ぬれば。黑羽二重の中古あれど。借き事には紋が少し違ふと亭主頭を掻く。いかなる紋かと聞くに。藤は藤なれど上り藤に大字とはいかさま持餘し物。此小袖六年の間前後に借人唯の二人と迷惑さうなる顏色然もあるべし。

亭主のいひけるは。いづれ御羽織御着用なるべし。さらば大字でも天字でも見えぬ處なれば御量見なるべしと敎へぬ。なるほど。羽織だに脫がずば何の事もあるまじ。されど羽織も此方に持合はせざれば之もお宅の御厄介なり。羽織には大字の附かぬがござりまするかとあれば。亭主少時小首を傾け。損料物の中には無けれと。今月質に取りたる中に在れば。一日二日の御用ならば。御慇意の間がら極内にて御用達申すべし。されば酒汚箸の取など隨分御用心下されたし。いかにも心得ました。今一つ仙臺平の袴をと望めば。其には至極上等ありとて。多時待たせおきて注文の品々を渡しけるを。懷中にせし三布風呂敷の萠黃も春過ぎて夏と茂り。秋も末冬の初の枯草色なるを。そと廣げて大事に包み。夜を幸ひに長家の前を忍びて我家の裏口に着

けば。見識るはずの犬めに吼えられけり。此夜父親は長年の重荷を卸して草臥の高鼾。耳にうるさく寢がての母は。明日こそいとし子を浮世の潮に突放し。許多の苦勞の爲始と。はや行末を豫想りては。また更に過去の事を喚起し。とかくに別離の暗愁胸に滿ちて。此折から目出度心地せぬを。何故と我さへ知らず人に奪はれて遠き國へ我子の送らるゝやうにも想はれて唯悲しかりき。

お銀は親妹に別れむ時のいよ〳〵逼りて。銀滅金の指環を玩弄びて流元に轉がし。遂に庇間の下水に墜して涙の出るほど母親に叱られ。父親を賴みて探してもらひしが今に見えざるなど。幼稚の古蹟多き馴染の住家も今夜を見納。明日の今頃は知らぬ坐敷の屏風の中と。かゝる古借家も故郷となれば懷し。

來年は廿歳と女子の春もやう〳〵過ぎ行くを悲み。此度の相談を良緣と心急かれしまゝ。たしかなる思慮もなく一圖に取極めたるものゝ。其姑尋常勝れて氣むづかしく。夫なる男も情薄くして。居辛き家なりせば如何すべき。暇取るにしても。氣に染まぬ主取りたる奉公とは譯違ふて容易き事にあらず。離れてどうぞなるかといへば。どうもならで疵物で棄たるべし。もし又緣切りたくも切られぬ義理など起りて。厭忌を忍び苦艱を怺へて荊棘の床に起臥の。世に在る思出もなくて暮さむには。一思に死なむよりなほぞ辛かるべき。

分別の上にも分別して。よく〳〵添ふべき人と見立て。緣附くべき方と斷定めての後ならでは。返事は嘘にもすまじき事なるを。と思へば思ふほど身上の氣遣しさに後悔の汗流れて。身毛は彌立つばかりなり。

悪き事のみ考へ窮めて行く處まで行けば。又我を慰むる意も發りて。否々さにもあらじ。此方だに眞實を盡し自己を正しくせむには。祈らずとても神や惠を垂れたまはむ。鬼を欺く人心も自から和きて樂き目をも見るべし。誰もかく後來を案じ人を怖れなば。世間に嫁入する女子はあるまじく。嫁入りても孫を見る母はなかるべきに。一軒の家には其々の女房ありて。同乘して花見に行くもあれば。黑くなりて俱稼するもあり。是皆案ずるほどにはあらぬ證據なり。

女一代に一度は誰しも夫を持つべき身なれば。此緣夫を危みて破談にすとも。其次の緣夫にも必ずこれほどの取越苦勞はあるべきを。女子を愚痴とは恁る處をぞ謂ふなるべき。今更何程案じても悔いても復らぬ事と心を定めて。鷄の初めて鳴く頃少し交睫みしが。覺む

れば小春の日影麗に鶴も舞ふべき天と。兩親に語れば斜めならず歡びぬ。

「いよ〳〵今日」の今朝は。心地清しく胸は限なく霽れて。思ふ事無く考ふる事無く。唯食事の進まざるは平常に變る驗かと自ら思ふのみにて。昨夜までは涙も出で汗も湧き。悲歎に裹まれ憂慮に惱まされ。骨も疼き血も冷ゆるかと疲れし果てし其悲歎も憂慮も。涙も汗も。今日を焦點なる今日となりて。我境遇の遽に一變したらむやうに。不知不識しくも心落着きたるは。何故との疑念は融けざりき。

姉と同伴も今日を納めなれば。隨分中好く洗しあうて。今まで喧嘩せし回復して後悔の種を遺すなと母親に笑はれて。石鹸垢摩朴木炭。糖袋には平素よりも多分の洗粉を仕込み。頸白粉の小壺物。取揃へて新しき手拭に裹み。母は用あれば一足後より。二人は混まぬ中に立出づる後影を父親見送りて。まだ一人重荷がと大息吐けば。散々に世話を燒かされ。物を懸けられて。頓て手助にもなる頃唯他に取られ。女子持つは五割の損と。母親はつく〳〵愚痴をこぼしぬ。

湯より歸來れば髮結待懸けて。御祝儀戴くばかりにも花客樣一代に一度の曠と。腕を揮へば時間もあらず。

入りて。見事なる髮形。髷の形も高等に出來て。聊も言分なし。其鏡仕舞ふにも及ばず化粧急きて。やう〳〵首から上の仕揚りたる頃十二時の鳴りければ。それ二時には媒妁人の入來と支度を急ぎ。父親は例の羽織。母は例の小紋縮緬。借りものとは想はれぬ衣裝附由々しげに推列び。上座にはお銀が黒縮緬の目立たぬ袵模樣の小袖に。下着は鴿羽鼠地の更紗縮緬。模樣緣の絹の手巾を疊み丸帶して帶揚は緋無地の縮緬。置床の前に端坐して左に持ち。右手の遣端に迷ひつゝ。白茶繻珍の

したる姿を。之が我姉かと驚く許りに見違へて。お鐵も頻に眺め入るほど艶なり。間も無く媒妁人車にて駈着け。彼此談合の間にざつと祝の盃出でゝ。時分は好といふ頃日は落ちて戸外も闇うなりぬ。

娘に附添ひて兩親出拂ふ後に。夜分お鐵一人は氣遣はしと。かねて心易きお針の老女を午後より頼みて。留主は二人の役隨分氣を着けよ。遲くとも十時には還らむと契り置きて。人力車も揃ひたればいざと一同席を立てば。媒妁人を先に次は父親。花嫁を取圍みて殿は母親。しづ〳〵と立出づれば。坐敷の隅に物思はしき顏して。音も立てず沈みゐたりしお鐵はばた〳〵と驅け來り。姉樣と袂に縋りて泣出せば。お銀も一足づゝ追

る別離に胸塞がれる折から。堪へかねて手巾を嚙緊め。顔を背けてお鐵の手を緊むれば。なほ泣立つるを門外には人の居るぞ。見悪しと母は小聲に叱りて引放せば。仆れたるまゝ袂を敷きて涙は歇あざりけり。せめては別離の一言と。姉は物を言はむとするに。涙咽喉に塡りて聲は出でず。唯一目見返りて車に乘れば。門の外には一町内の男女皆此處に集まるかと覺えて。黒山のごとく立重れり。

（三）

馬には乘つて見ろ。人に添つて見れば。年齢は三十六であるが。醜男子ではあるが。二度目ではあるが。澁谷周三が何の〳〵可厭な譯ではない。その譯ではないと譯ば謂ふに謂はれぬ譯で。之を識るものは當人のお銀。其一斑を聞いたものは獨り母親である。

半月ばかりの内に衣類が出來る。簪が出來る。黄金指環が出來る。家重代の黄金裝の一刀の目貫を剝して帶留が出來る。時計が出來る。此上は早く子供の出來るやうにと。兩親は大熱望の大歡喜。然し我女房の事なれば。婿殿は然もあらうけれど。蛟遣火の烟たき姑はどうか。と陰ながら心配した隱居は。なるほど人附の悪い。愛想氣の無い。竹筒を藤蔓で縛たといふやうな性である代り。萬事に無頓着な。朴訥だけに面倒入らずで。家内も無爲にして化すとは何よりなり。

旦那樣は御寵愛遊ばさるゝ。御隱居樣とのお中も至極好くお見受申せば。婢も書生も車夫も奥樣々々と奉り。威令自から行はれて勢旭日の登ごとく。昨日の娘の身を考へて見れば。今日の奥樣の我身が我身ながら不思議でならぬほど不思議で。これが玉の輿かと乘つて見れば異なもの。

庭は廣し。花卉果木は多し。裏には畑もある。家宅は大きくて坐敷は奇麗で。旨いものも食られる。嗚呼母樣やお鐵にも恁した所で保養がさせたい。といふ念の起るは人情の常。近日呼むで御馳走でも志たいと思つたものゝ。日數も經たぬ内から我儘らしいと怪へてみれど。歸寧の時に妹にかうだあゝだと種々話をしたれば。是非近い内に。呼ぶとも〳〵呼ばなくて何としやうと。堅く約束したを待遠に思つてゐやう。と想ふほどなほ一日も早く呼びたい。妹の方でも來たい。母は倚更逢ひたいは山々なれど。先方は男女の四五人も役つて居る家へ。あれが奥樣の母樣か妹か。といはれるやうな服裝で行きたくない。お銀の恥辱と。切ない思

をして辛抱してゐるとの事。なるほど然う聞けば道理ではあるが。さらば澁谷へ行く曠衣は何時出來るのか。博多結城の布子か。縮緬の散膝ぐらゐは出來る事もあらうけれど。小袖はまづ難しい。さうして見れば姉の處へ遊びにゆくは協はぬやうなものだ。とお鐵は折々母親に壁訴訟の愚痴を吐す

澁谷奥よりの手紙が二三通も來て。呼ぶほどの用も無いに。好猫の子を貰つたから見に來いの。羊羹とカスラが戸棚に一杯もらつてあるから。お鐵を伴れて是非是非などと。氣樂な事をいつて寄來してお鐵の心を拐る。もう耐らなくなつて。母様よう〳〵。ようてつばと鼻を鳴らせば。父親が可恐い眼をして。解らない奴だとぐつと一睨。これに縮むで陰へ廻つて母親に摩りついて。泣くがごとく悲むがごとく。忍るがごとく怨むがごとく口説き立つれば。母親は不便骨髓に徹して。鏡の裏に虎子の金子もあらば。紙を引剝して此急場の間に合はせたいほどなれば。泣付かれる體を持餘して。衣裳の工夫に肝膽を碎いても。無い袖は振られぬで。當惑の極は吐息虹のごとく。最少し辛棒しなと親の口から言憎さうな挨拶にお鐵は失望して此上强請る元氣も亡く。めそ〳〵と泣き出す傍に。母親は硯箱に向つて。用事があつて行きかねると返事を認め。お鐵が投函に行つてポストの蓋が裂れるように八當小腹を立て、二三日はつん〳〵してゐる所へ。お銀は右の返事を見て。隱居が親類廻りの留主を覗ひ。今日は書物だといふ夫に留主を頼み。車を飛して來て見ると。おやまあと母親は駈出て煙草盆を蹴飛ばす臺所で水仕事をしてゐたお鐵は。妙な顔をして入口を覗けば。束髮の美しい……。「あら姉さん！」と持つてゐた束藁を水瓶の中に投込み。飛着かむばかりの勢で驅着ければ。威嚴備はる奥方扮裝悠々として立ちたまふのに拍子が抜けて。笑ひたいやうな。たくないやうな。不思議な顔をして襟を取りながら。びしやんと坐つて極の悪るそうに挨拶する。お銀ちやんは舊時の事。今は澁谷の奥様。改まつた挨拶をして。

「おやお前大層髮が壞れてゐぢやないか。」

「あゝ。」とお鐵は悲しい顔をして。慣れたさうに髷を捻くりまはす。

「何處か悪いのかえ？」と聞けど默つてゐる。

「なあに少し御機嫌の悪い事がありますのさ。」と母親は茶を煎れながら。お鐵を尻目に掛けて笑ふと。

義理に逼つた苦笑をして。お鐵は横の方を向く。
「どうしたの？」
「へゝゝゝ」と母親はお銀とお鐵とに當てゝ。意味兩用といふ笑を爲る。
お銀も之は何か曰くのありさうな。其曰くは何か可笑な曰くであらうと笑ひかけて。
「どうしたの？鐵ちやん。」
お鐵はくるりと母の方を見向いて。
「お母樣いはうか。」と姊を得たので勇氣日頃に十倍する。
「何だね。いはうかなんて。」
「何だよ。」とお銀に言つても可からうかと母の氣色を窺つてゐるお鐵の膝を突く。
「あのね。羞かしいから止しませう」と問答の中へ母親が。
「先日はまた度々手紙を。」と横鎗を入れる。
「何故來られないの？」とは龍の腮の珠に手頭の觸るやうな心持。お鐵は機一發と身を硬くして。俯いて片睫を飲でゐる。
「用事があるなんて他人がましいぢやありませんか。」
「實はね……」と母親も言出しかねて。
「お茶を」とお銀の前へ藤編の茶托に露根蘭の金色燦爛茶碗を載せて出せば。
「おや綺麗だ事。家の茶碗？」と取擧げて眺める。
「失禮な事をおいひなさいな。此急須も宅の品でございますよ。」
と母親大自慢で。茶碗と對に買つた急須を見せると。
「おや〳〵。」といひながら手に取つて見れば。蓋の鼻鈕の蘭の花は好けれど。葩が一枚缺けてゐるのにぷうと噴出して。急須を下に置いて吃々と笑ふ。二人は何の事やら解らず。お銀の獨して笑ふを呆れて見てゐる。
「おや御母樣。氣が着かないの？」
「何が」といふ目前に急須を出して。
「蘭の葩が一枚無いよ。御覽なさいな。」
どれ〳〵と視て。「おや〳〵〳〵〳〵。」といふ聲に節が附いて可笑いとて。姉妹が吳と笑ふ中に自若として。母親は眞面目に希有な顏色で。
「怪しからん事だねえ。鐵の鹿相かえ？」
「あら御母樣否な。買立から私は恁いふ花だと想つてあたら。目が惡いものだから御母樣。自分が勤工場で欺されて來たのだよ。」

「さうかね。まあそれでも此間御父様は頻りに捻繰まはして。どうも此鼻鈕の花の恰好が好く出來てゐるといつて。大層賞めてお在だつたよ。否ぢやないかね。」

といふを聞きながらお銀は茶を一口飲むで。

「おや。お土産を出すのを忘れて居た。鐵ちやん二疊にある包を一寸。」

お鐵が取に行つて見ると。蒲黄羽二重の定紋附の袱紗の大包。菓子ではあるまいと持上げれば。下には衣類でも在るやうなり。

お銀の指揮に解いて見れば。四棹入の羊羹二折。カステラ一釜。到來ですよと出せば。

「其はまあ澤山に。御父様大喜悦。」と母親は蕩けさうな顔をして。他人に百圓もらつたより大恐悦なり。

袱紗の底に殘りたるは水色縮緬の羽織と。其下の一枚は。嫁入の半年ばかり前に出來た糸織の。其縞の好さといつたら。もう〳〵〳〵〳〵〳〵とお鐵が其時身顫をした小袖なれば。彼をどうする心算かと薄々横目を遣つてゐると。お銀は此二品をお鉄の前に出して。

「代りが出來たからお前に上げやうと思つて。」

聞くや見るや胸悸々〳〵唐茄子と蘿蔔芋と芝居が。手を引かれて誘ひに來たやうな氣持がして目の眩ふほどの嬉しさ。母親は思はず乘出して。

「お前まあ這麼に可のかえ。代りが出來たつて不斷着にでも爲れば可いのに。可いのかい。」

「鐵ちやんのが無からうと想つて」

「無からうの段ぢやありやしない。あの銘仙のね。彼と棒縞のと。古うい鳥籠縞の黒手の八丈。そんな物だけれど。着て出られるやうな衣は無し。實は其一條で二三日大不機嫌でね。」

「さう。何か强請つたの？」

「强請つたつて目的はありやしないけれど。之が（と自分の衣服を指して）無いものだから。折角手紙をおくれだけれど行けないところから。御父様に叱られたり何か大世話場があつて。御愁嘆の處を。鐵とうだい。否な子だよ。那麼顔をして。お禮でもおいひなさいな。」

「姉さん……。」と何處か擽つたいといふ恰好で會釋をする。

「さう。まあ。」と大方右の如く鑑定を着けたお銀は。始めて知つたやうな顔をして。

「おや之が間に合へば。別に手離されない用事もないのでしやうから。二三日の内にお出な。御母様と。」

因でお鐵の御機嫌は直る。母親は彌喜ぶ。お銀も滿足する。御父樣が早く退省になれば可いにと噂をしながら午餐も濟めば。また茶を煎れかへて。女同士の話は愚にもつかぬ事を。大事さうに問ふたり答へたり。誰さんが引越してしまつたから。此町内に柿のなる家は亡くなつたの。襦袢の袖を色揚にやつたら。紬と違へて縮緬が來て。亭主が謝りに來た事の。唐菜は柔かいが。澤庵は刻むで鰹節を懸けたのが好きになりましたの。椽下で鼠が九ッ子を産むだの。釣瓶に釣られて裏の春ちやんが井戸へ陷ちて助けられたの。一昨日初霜が降つたが御覽かい。昨夜の火事は半鐘が鳴らなかつたの。巨燵は毒だの。山の手は寒いの。雪の降る日は地面が白いの。梅が咲くと香ひがするの。何のかのと話して居る内に時計がちん〳〵。

「二時かね。長話をしました。」とお銀が袱紗を捻くれば。

「まあ最直に御父樣もお歸宅だから其まで。長い事はない後一時間。」

と留められて見れば。どうで今まで居たものを。會はずに歸るも氣が濟まぬ。と立かけた膝を敷いて又何か話の種を拵へて。火鉢の例に巴のごとく額を寄せてゐる所へ。御父樣のお飯宅。

「すばらしい駒下駄があると思つたら。お銀か。よく來た。御馳走をしたか。澁谷樣は御機嫌よしか。我も一寸上らうとは思ひながら御無沙汰ばかり。御母樣にも御機嫌好か。お前も風も引かんかえ。結構々々。彼所に居て這麼處へ來ると。何だか鼻が支いて息が塞るやうだろう。否銀くらゐの家は東京にも巨多は無いて。今日は何ぞ用か。御機嫌伺ひだと。伺はれるほどの御機嫌ではないが。いつも達者でまづ〳〵目出たい。時に久しぶりでお銀が酌で一盃飲みたいものだが。何急ぐと。なるほど。御隱居の隙を覗ひ。極内で怪しからん事だ。微行といふ洒落か。なるほど。我の飯宅を待つてゐた。遲くならん内に飯る。いや其は。はい〳〵はいどをう澁谷樣に暮々もよろしくよ。はい〳〵。氣を着けて行きなよ。車は餘り駈けさせんが可い。緩々となる。」

（四）

姉の來た次日に髮結が來て明日はといふ聲懸りの所爲か。至極御意に惚つた島田の出來。宛然姉樣のあの時の樣だと後生大事に髱を劬り。蝸牛が日和を見るとい

ふ頸狀をして。洗物でもさせると小桶の水に映る影を撓め直めつ眺めてばかり。「それほど氣になるなら戸棚へでも仕舞つておけ。」と父親に窘められても。猶且氣になつて。竊に一策を案じ。戸棚に鏡を立てゝ置て。隙を覗つては一寸々々見に來るといふ寸法。「いくら。大事にしても寢たら形なしさ。」と母親の言つたのが。ぐつと警策になつて寢像頗るおとなしく。常よりは凡そ二時間も蚤起をして。無性に朝飯を急ぎ立て。甚だ相濟まん事だと。律義を言張る父親を。昨夜から飛付二人懸りでやう〳〵負かして。病氣届で役所を休ませの。扨留守居の我一人が貧乏鬪だと。先から愚痴の出ぬ中此方から一合增といふ觸込に。父親は醉はぬ前から口が利けずに頷いて。早御自身に德利を提げて裏口から買ひに出られるといふ手廻の好さ。此方も早くと塗る。着る。車が來る。乘る。走る。車の上で衣紋を繕ふやら。襟を直すやら。何を急くのか。誰に逐はれるのか。一向解らずに。母はお鐵に急かれるからなれど。お鐵は夢中で唯急ぎ散し。車に乘つてから少し落着いて考へて見ると。通魔がさしたやう。

無紋稍古の二人乘。車夫は中屈の草鞋ばきで。白地に竹に虎といふ蔽膝では。玄關まで曳込ませるには大に憚りあり。と角で下りて裙を叩き。帶を直して直と玄關から懸かれば。褶の無い袴を穿きて。右の硝子に裂の入つた眼鏡を懸けた書生が取次に出て。變に訛のある聲をして。何方からといひながら蛛蜘の如く跼まると。小鬢に一團浮いてゐた雲脂が。ちら〳〵肩へ降積る眺望の氣味の惡さにお鐵はぞつとして。「姉さんは癖性の癖に。よくまあ彼を何ともいはない。」と入らぬお世話を氣にしてゐる。

取次が引込むとお銀が。家にゐた時分は命から二番目であつた他所出の糸織に。今度出來たらしい黑繻子と更紗縮緬の晝夜帶をしめて。生意氣な束髮に結て微塵飾氣無しといふ頭で。肉白粉を慢けて臙脂を一寸點して。粹な粹な！父親が見たら苦い顏をしさうな姿で出て來て。

「おや。さあ此方へ。よく早くねえ。」といひながら案內する後に跟て行けば。四疊の玄關の次が十疊の應接間。食べたいほど綺麗な天鵞絨氈を一面に敷詰め。眞中に淺黃地に花鳥の縫摸樣のある薄羅紗の卓子被をした圓卓を据ゑて。一間の板床に古薩摩の唐冠の香爐。幅は一蝶が浮世人物の二幅對。床脇が寢覺棚。袋棚の

上には古銅の揚柳觀音。達棚には古代蒔繪の手文函。並べて印譜二帙。白磁の匾壺には庭のを奥樣が入れたとも想はる。山茶花が一輪。此下に古竹据梁式の菓盆に佛手柑を盛つて。額は大小二面を相對に懸けて。一面は東湖自筆の七絶。一面は某大臣の揮毫なり。此次奥の間の正面。鋪込袋棚の下に西洋式の書棚耶蘇の厨子のごとく。此中の書籍が凡そ千圓と聞て御母親吃驚。

隅に紫檀の大机を据ゑ。其前に縮緬の座蒲團。脇に手爐。茶道具。煙草盆などよろしく。總て主人居間の躰。隱居所の咳の聲にて幕開くといふ誂。お鐵は始終信夫が吉原に尋ねて來たといふ見得で唯きよろ〳〵。母親はまご〳〵。旋て奥方の居間に通れば。下女が黄八丈の茵を持つて來る。手爐が出る。茶が出て少時すると。隱居は羽織を着換へて挨拶に出て來る。

「此所は汚うござる。彼方へ〳〵。」と切に勸められて母親は立上る。

「貴方も〳〵。」といはれて。お鐵は何も言はずに會釋ばかりしてゐると。

銀「これは宜しうございますよ。」

「澤山御馳走しておもらひんさい。はゝゝゝ。」と男のやうな高笑をして。

「さあ。あんた。」と母親を伴れて出て行く後影をお鐵は呢と見送つて。

「可恐い顔だねえ。」と極小さな聲。

お銀は何ともいはず唯莞爾。

「姉さん旦那樣はお役所？」

「あゝ。」と横を向いて。何だか耳の底が痒さうな面色でゐたが。傍に在る長煙管を取つて。

「鐵ちやん。煙草を吃むで鼻孔から出して見せうか。」とは餘程修行を積みて。自慢の一藝と見えたり。

「馬鹿々々しいぢやありませんか。」

奥方は蚤を捕るやうな指頭をして煙草を捻つて。雁首に詰めると。ちと餘計の分を毫取つて。

「いゝかい〳〵。」鷄子に手裏劍といふ恰好ですう〳〵と吸ひ。ふうと見事に二條の煙を立てる。此處に到りてお鐵も感に堪へたか。

「おや〳〵。」と極めて賞讃すると圖に乘り。最一服と取懸かる時人の足音。煙管を推隠すと隱居が入いて來るので。二人共慌てゝ居住を正す。

「お銀さん。御酒の支度でもなさらんか。」

「母ならば一向不調法でございますが。」

「お飲みんさらんか。それなら御膳の……。」

「あなたはお一盃召上りまし。」

「私も一人なら頂けませう。お鐵さんちとお出んさい。」と捨言葉で出て行く。

お鐵はかぬて姉に逢いたひ〳〵で。胸には一杯話柄が溜つてゐれど。扨逢つて見れば昔日のお銀ちやんにあらざる澁谷の奥方は。流石に奥方の見識が附いて。自分とはまるで段の違ふ人のやうに考へられて。左右なくは擊て蒐かられず。何となく變に他人を見るやうな心地がしてならぬ。

其癖姉の方では打解けて煙草の曲藝もして見せる。相互の外には他の知らぬ秘密事件に就て冗談口も吐く。お銀は依然お鐵の姉の定なれど。妹の方で氣怯がして。兎角奥齒に物を介むでゐる。其著しき證據は。何かにつけて遠慮をするやうな氣色が見える。どうも隔心があつて眞實の妹のやうに思はれぬ。親類の娘が遊びに來たやうな鹽梅で。其では面白くないからと。お銀がいろ〳〵手を盡して此隔を打壞しに懸かれど。お鐵は固く氣を緊めて。或親しい奥樣のやうに遇つてゐる。想ふに。之はお鐵の氣質がちと偏人の方ゆゑ。姉だな。お銀ちやんだなと心の中では思つても。奥樣の姿が強く眼に染みて。多くの奉公人が氣味の悪いほど唯々いふやら。其所等の戸棚を開散らして。立派な道具を惜氣もなく取出すやら。此宏々とした家内を自在にする威權を非常に驚くと俱に。那樣威權ある人を崇ふ念が出て。どうも狎れにくいのである。二つには。かぬ〳〵兩親にいはれた言がある。姉も澁谷の奥樣になつたからは。家に居た時分のお銀ちやんと同じに思つて。仂なく狎々しくする事は決してならぬ。姉の顏にかゝる事だと。其も感化の力はあらうけれど。首には合羞が先に立つて。おのづから思ふ事も控へ目にして言はぬやうになるのを。お銀は不滿に感じて興無がる。お鐵の方でも逢て見れば想つたよりは樂が少ない。

時分といふので御膳が出ると。尋常ならぬ馳走で。皿の數々所狹く。箸が戸惑して。見たばかりでも腹中が一杯になる。旋てお銀の案内で庭を巡覽り。裏木戸から畑の方へ出て坐敷に還れば。食事の跡を一掃除して。人數ほど褥を敷き。前とは變つた茶道具を安排して。銀瓶がふう〳〵と煙を吹いてゐる。茶菓子は切籠細工の硝子の大蓋物に西洋懸物と。九谷の鉢に象牙箸を添へて。色々の蒸菓子が山盛にしてある。隱居も同席で四

方山の談話の内に車の音がら〳〵。お歸りい。それとお銀は急いで出迎に立つと。「あ。然うか。」といふ聲がして樣先に現はれたのは主人の澁谷周三。小豆色の小外套を被て。思ふ樣緣の反た茶の山高帽子を冠り。荒布革の書類入の裂けさうに脹れたのを小脇にして。一寸會釋をして次間に入り。頭髪を撫でながら直に出て來る。

緣談のあつた時は。「あの人かい。」と頭を擡めたお鐵も。つら〳〵視るのに。我姉の夫と思ふ所爲か。容貌は悪い。悪いけれども氣障な處が無くて。いつそ武骨らしい處が却つて好。樣子も言語も顏に似ず柔和で。氣も善さゝうな。かうして姉樣と並べて見ると松の樹に藤が咲いたやう。容色の揃はない夫婦は照應が悪いとばかり想つてゐたが。決してさういふ事はない。男の髮に生白いのと。女の美のと伴立て行くのは。信に見ばの好くないものだが。此人と姉さんは信に照應が好よ。眞箇好よと感心した。

三十分許愛想をして。此から宴會があるからと挨拶をして又出て行く。

夕飯を食べてから飯れと。陰にお銀が留める。陽には隱居も。此方の暇乞の挨拶を一向取合はずにやい〳〵と抑留はすれど。今日散財を懸けるほど。お銀が姑に對して其丈心勞をしなければならず。又實家が貧くないだけに口善悪ない奉公人に陰言をきかれるのも辛し。何のかのと母親は母親だけに氣を働かせ。若いものゝ思ひつかぬ。綿密な思慮を持つて無理に飯るとなつて玄關に出れば。達者さうな車夫が綺麗な二人乘を格子外まで附けて待つてゐる。菓子やら裂りの料理やらを。蓋の持上るほど塡めた二重箱の包を下女が先に持て出て。漏れ物だからと車夫によろしく賴む。之に乘れば往はよい〳〵還は早いで。日沒前に家に着くと。洋燈掃除で火屋を壞して。指を切て狼狽してゐた父親が。やれ待兼ねたと飛で出る。

（五）

其後は天下泰平家事無事で。お銀からの手紙にも。旦那樣がどう遊ばされたの。母樣はかう仰せられたといふ愚痴も無く。それが何より結構と生家方の歡喜。此上の願は。初孫の顏を見たいのと。お鐵に好婿を娶りたいの二件であるが。女親は家に掛替のお鐵といふものがありながら。離れてゐる姉のお銀が案じられるやら戀ひしいやらで。火事でもあればお銀の方ではない

か。風が吹けばお銀の方は寒くはあるまいか。旨い物でもあれば。あゝお銀に一口と。何かに就けて念に懸かるはお銀の事ばかり。因でお鐵は。母親の「お銀〳〵」に聞飽きて。又かいと可厭な顔をして。私の事も適には言つてくれても可さゝうなものを。同し胎の子でないかと少し妬けろ氣味なり。母親の曰く。其は同じ子だものを。彼が可愛くて此が憎いといふ理はさら〳〵なけれど。お前は私の手許に居る。お銀は遠く離れてゐればこそ。雨に風に案じられる。其はお前親の情といふものだ。其證據には二人一所にゐた頃には。少しでも分隔をした覺は無い。一個の物を尺度を當てゝ二個に折つて。分けて遣るほどにしてゐたではないか。と切に分疎をいへば。それでも内々は姊樣の方を餘計に可愛がつてゐた證據が又私の方にもある。其は謂はれないけれどもなどゝ未だ拗る。

恁る次第なれば。儘になる事なら毎日でも母親はお銀の家に行つてゐたい。行つてどうするといふ事もなし。會つてかうといふ話說のあるではなけれど。唯行きたい。會ひたいといふ。其處が親の情かも知れず。矢も楯も耐らぬほど行きたくても。今は我子ではなく澁谷の奥方。其家には主人もあれば親もある。我出店でも見巡るやうに繁々は行きかねる。行きかねるほど意固執に念は增す。

そこで。用も無いに繁々出入は不良と知りつゝ。何とか用を拵へては出懸ける。お鐵も一所に其都度伴れた事は山々なれど。さうしては廉立つて遊山臭くなるから。色々に宥めては三度に二度は留守番をさせる。それ又愚痴をいふ。御母樣は一人でお樂みつまらないのは御父樣と私ばかり。私が一所ではどうせお邪魔になりませうからと泣顔をするのを。父親が見兼ねて。行くものなら伴れて行けと。家では責められる。彼方では。さしたる用のあるでもないのに。何のかのといつて好く來る親だ。とまづ隱居が顔を顰める。といふほど實際度々出入るではなけれど。姑は姑根性で。生家の親の餘り來過ぎるのは。畢竟嫁の心の鈍る原因で。何時までも生の親を恃む氣が抜けぬと。自然姑が塵末になりたがると。異に僻見を出す。母親からは之を僻見といへど。萬更僻見とも謂はれぬのである。姑は最一つ僻見を抱く其僻見は起るの日に起るにあらずして。遠く此嫁の來た時からともいふべし。身分の己より優れた家から嫁は娶ふなゝといふ格言は隱居も承知してゐるが。さればといつて餘り不釣合の貧家の

娘を娶ふのは家の恥辱といふものでござるよ。今は知らぬど往時はと。媒妁人と周三を並べて置いて。底意を知れがしな言をいふたれど肯かれずに。お銀を娶る事に決つたものを。隱居の身で故障をいふ理もなしと目を瞑りて。お銀が來て見れば氣は着く。優しくはする。當人に言分は少しも無けれど。生家も家筋の卑いのが頗る御意に召さずして。先方は磁石で此方が鐵。いづれ吸はるゝに極つてゐると。其ばかりを苦にして。私の亡後は彼東京辯のちやほやと世辭の好い母親が這入こむで。どういふ事をするか知れたものでないと念つてゐる矢先へ。此頃はもう其下拵か。手廻の好い。懊惱ほど出入を爲始めたが。會計はお銀の預りゆゑ。どんな幻術も自由自在なれば。其處を見込むで强請に來るのかも知れぬ。事情をいつて泣付かれて見れば。親だもの。苦い思をしても貢ぎたいは人情。まして財布尻を握つてゐて見れば。攫出して袂へ捻込ませるは知れた事。十が九まで其に相違はない。金錢の事は扨置き。來る度に何か知らぬ包を提げて飯るのを。お增に聞いて見たれば。買つて置いた魚だとか。肉だとか。到來の菓子折だとか。時によれば澤庵のやうなものまで。新漬だの。味が好のといつて持せて飯すさうだ。其奉行はお光が鼻藥を貰つて忠義立に勤めるといふ事まで知つてゐる。

其だから言はぬ事ではないに。周三もまた周三だ。美貌望みで娶つたとはいひながら。あれほど鼻毛を延ばさずともの事を。お銀がいふ事爲す事是が非でも唯々と。馬鹿になつて聽いてゐる事もないものだ。あれだからお銀も好事に思つて精々と運ぶのだ。此家を嫁の親などに搔廻されて耐るものか。と浮世を十五年前に捨て。隱居所に籠つた姑も。政權藤原氏に飯すると見て。痛嘆悲憤の餘奮然被布の袂を攘げて大いに爲すあらむといふ意氣組で。此頃は前のやうに隱宅の隅に屈むで。繪入新聞のお家騷動ばかりを苦にしてはゐず。居間の火鉢の正面。張臂をして烟草を吃しながら。まづ嫁の擧動から奉公人の働振をじろ〳〵。八方睨といふ眼色をして。何も言はずに腹の中の小言帳に委細留めてゐるといふ樣子。

恁とは知らず母親は有もせぬ用を拵へて來て見ると。之はどうした事。隱居どのは日暮の梟といふ顏で。まじ〳〵と火鉢の正面に座つてゐる。眼中の容體。眉間の皺の具合いかにも。尋常ならぬ樣子で。奉公人はまた心中大に憤る處あるがごとく。外貌は頗る憤む處

あるが如く。常は竈前に笑靨のするのが。今日に限りて火の消えたか。水を打つたかと想ふほど寂寥閑として。流元で大根を切る音が妙に冴えて聞える。お銀を見れば。いつもならば火鉢の前に天鵞絨の歯を鋪き。隱居所へ上げる茶でも淹れてゐる傍に。小説本の讀未了が伏せてあるといふ筋なるに。今日は臺所に自身出馬とありて。午飯の菜の指揮をしてゐる。母親は入つて來たは來たれど。變つた樣子に氣を奪れて。ちと足が進みかねるといふ狀。婢等は「お入來なさいまし」と襟を外しながらばた〳〵下坐をする。「もうお支度ですか。」と愛想を與れてから簡略に親子の挨拶がある。此時お銀は餘り嬉くない顏をする。「光や。之が煮えたら直にお魚を架けておくれ。」と母を伴れて中間に入り。「此頃はちつと御機嫌が悪いのだから。」と耳語をする。

「然うかい。」極小さな聲に極力を籠めて。母親は直と居間に通ると。隱居は一目見て。「また來た。」といはぬばかりの顏色で鯁膠ない挨拶をして。後は物を言ふのも太儀でござるといふ風なり。

此處でちやほやしてくれゝば母親も居易いといふ譯なれど。根が格別の用事も無くて來たのゆへ。餘り度々來るのを變に想つて。隱居の機嫌でも悪くなければ好がと。案じてゐる處へうんと一睨。ぐつと肝頭に徹へたのである。

然し自身が來てから急に不機嫌といふのではなし。むか腹立と兼ねて聞いてゐれば。何か些事を氣に懸けてゐるのであらうから。どうか機嫌を取直すやうにしたいと。種々御意に入りさうな事をいつて見れど。蒟蒻に吸瓢を懸けたほども利かず。「然やうでござるかなう」などゝ張合のない應答ばかりして寄着けず。忌々しい婆めと勃然とはしたれど。可愛娘の姑。姑の不機嫌の捨所は嫁の身一つ。お銀の難儀になる事なればと。目を瞑つて下から出れば增長して。遂には新聞を取つて讀始める。さほど對手にするが否なら隱居所へ引籠むだが可さゝうなものを。どうして此處が一寸でも動けるものかとは隱居の腹なるべし。

かくまでにしても隱居に見放された母親は。此上の手段は無しと諦めたが。お銀を對手にして談話を始むれど。例の用無しゆゑ談話らしい談話は出來ず。少しは話の無いではなけれど。其は隱居を憚る事のみなれば。

母親も戸惑して此處少時默然。隱居は澄して新聞を讀む。お銀は灰に○や□や十文字を畫いたり消したり。母親は鐵瓶の蓋を食指で摩でながら。湯氣の立つのを眤と見てゐたが。

「それからね。お鐵の緣談だがね。」と漸く一條の血路を開く。お鐵の緣談といつても極模糊した事で。未だ相談に來るほど出來たのではなけれど。隱居の手前子供ではなし。万更用無しで遊びに來たと想はれるのが苦しさに。不圖考へて。さも用あり氣に怎う言つて見たのである。

お銀は母親の切々來るのを隱居が快く念はぬとは薄々知つたゆゑ。今日も亦來たのを南無三首尾惡し。どうか隱居の前へ取繕はなければと心を痛めてゐる處へ。妹の緣談とは成程親の來るのも尤な用事。何の用で來た。來ずともの事をといふ顏の隱居（是見よがしに。

「おや。お鐵の……而して大概極つたんですか。」

「極つたといふほどでもないけれども。まあ良さうな話だから。お前にも急に言つて相談して來いつてね。また御父樣が彼性急だものだから。何でもかでも今日行て是非話しをして來いつて。突出されるやうにして來ましたのさ。」

隱居は何も聞かぬ顏で頻に新聞を讀むではゐるが。甚麼談話をするかと引立耳で。其方にばかり氣を取られてゐるゆゑ。目はお留守になつて同處を繰返して讀むでゐる。

「さうでしたか。見合は？」

「四五日內にしやうかとも思つてゐるのだけれど。其前に少しお前に相談をしたい事があつてね。」

と言未了でわざと忸怩する。忸怩などはせずともの事なれど。これからは他聞を憚る秘中の秘密。隱居は其と氣を利かして大方遠慮をするであらうと思ひの外。猶且悠然自若として新紙を眺めてゐる（讀むでゐるにあらず）

母親は此業突張といはぬばかりの悔しさうな目をして。隱居の樣子を眤と視てゐる。

「さうして先方の身分は？」

お銀は此話を眞に受けてゐもゐるやうに。突込むで來るので。母親は大いに避易して。持餘す氣味あれども。目顏で知らせる事もならず。爲う事なしに落着き拂つて。

「父樣の上役の方の周旋で。お役所は違ふけれどもやつぱり勤吏さ。」

「それはまあ大相好、ぢやありませんか。」

「まだ最一つあるのだよ。」

「外に？」　「外にさ。其方は會社へ勤める人だが。之も相應の口さ。それで……。」

と娘ならば壘を毟るか。のゝ字を書くかといふ處なれど。母樣なれば。雁首の煙脂を火筋で抉つて。少時思ふ處あるがごとく。遠慮する處あるがごとく。雁首の掃除も出來てすうと一服吸つて。とんと敲き。最一服吸つて敲いても。隱居は更に蠢ともせず。例の通り新聞を眺めてゐる。其内に

「裏の山茶花は盛だらうねえ。」と禪の問答でもするやうな緣のない言を突然言出す。

「盛はもう過ぎて今は何も無いけれど。もう少し經つと梅がね。」

「梅は好ねえ。花はもう梅の事だ。」

「あゝ。庭の枝折戸の側の蜜柑が餘程黃みましたよ。」

「あの蜜柑が？　さぞ見事だらうね。」

「行つて御覽なさいな。」

「蜜柑なんぞは八百屋に列むでゐるのより外に見た事のない人だから。ほゝゝゝ。」

蜜柑を玉につかつて此塲を免れる計略。やれ嬉しやと母親はお銀と伴立ち。隱居一人置去にして庭に出る。と。隱居は急に新聞を捨てゝ伸上り。硝子障子から二人の影を透かして。

「何を談しくさるか」と鐵瓶を下して火を撥け。手を暖るとて火鉢の緣に懸けた肘が外れて灰にすぼり。はつと思つて擧げる袖に扇られて雲のごとく灰が舞ひ立つ。

「これ誰か。增！光！」

女が駈着けて。おや〳〵〳〵と箒に團扇。水に雜巾。拭いたり敲いたり。隱居も耐らず陣を退いて本城に遁籠む。

二人は庭から裏へ出ながらこそ〳〵話。

「どういふものだか此頃は大變機嫌が惡いのだから。當分御母樣も來ない方が可いよ。」

「何で那樣に機嫌が惡いのだえ？」

「何だか解らないけれども。何か旦那に言はれたらしいの。」

「お前にも辛く抵るかい。」

「何別に。辛く抵つたところが悖はずにそつとして置くから構ひはしない。誰が來てもあゝいふ佛頂な顏をしてゐるのだから。御母樣も來れば側杖を食ふから當

分來ない方が可いよ。」

「あゝもう懲々した。來やしないよ。ぢや別に用も無いのだから私は歸るよ。」

「まあ御膳でも食べて。」

「あの目で睨まれて吭へ通るものかね。」

「ぢやあお歸りか。」と帶の間から懷中物を出して。紙幣を一枚紙に包むで。

「御父樣に何か。」

「おや然うかい。」と氣の毒さうに請取る。

（十八）

歸途に母親獨以爲く。隱居の今日の不機嫌はどういふ理由であらう。銀が何か氣に入らぬ事をしたのか知らぬ。さうも想ふけれど。聞いて見れば旦那に何かいはれたらしいといふから。さうかも知れぬ。あゝいふ風の姑だから。我は親だよ。大事な御母樣だよ風を吹かし過ぎたので。旦那も勃然として何とか言ひなすつたのが氣に障つて。一同に八當りのお相伴をさせるのかも知れぬ。一同のお相伴は兎も角も。私にまで當る事は無からう。私を何だと思ふのだ。馬鹿々々しい。私は銀の親ぢやないか。銀の親なら周三樣にも親だ。して見れば隱居とは親と親同士で同等の位ぢやないか。それでも娘が世話になると思ふから。一段下に出て御隱居樣々々々といつてやれば好氣になつて。他を目下に見て大きな顏をしてゐる。何の事た！娘が可愛からこそ腰を卑くして月に一度でも行つてやるのだ。何のあの佛頂面に用でもある事か。もう〳〵〳〵用があらうが。何があらうが。行つてやる事ぢやない。馬鹿々々しい。

憶起しても腹が立つ。今日の始末は何だ。我が話を爲掛ければ。何處に火事があるといふ顏をして新聞を讀みくさる。母親が娘に會ひに行くからは。色々話のあるのは知れた事だ。側に他人にゐられては骨肉同士の話は爲悪いぐらゐは誰でも知つてる事だ。それが解らないくらゐなら山出しの田舍ものだ。おゝ田舍ものだつけ。第一隱居といふものは隱居所へ引籠むで。猫火鉢にかぢりついて新聞でも見てゐれば可いのだに。妙にしや〳〵り出して奈何いふ意だらう。

憶それにつけてもお銀はさぞ辛からう。私なぞは半日ゐても這麼に腹が立つて悔しくて耐らないのを。御母樣々々と何事も風の柳に受流して。機嫌を取るといふのは大躰な事ぢやない。それにあの娘は鐵と比べると。

氣の快濶な發揮々々した娘であつたが。彼所へ嫁つてから大層落着いて。落着いたといふより何と無く鬱いで。始終考事でもしてゐるやうな鹽梅で。家に居た時分のやうでないのは。勿論一家の主となつたのだから然うもあらうけれど。一つはあの隱居に何のかのと苛まれるので。自然と氣が弱くなつたのに違ひない。なるほどこれだから世間では姑のある家へ娘を遣るのを否がるのだ。尤だ。無理はない。

那樣事をいつちや何ぼう何でも濟まないけれど。あの又隱居が來年や再來年お目出度なるやうな格ぢやない。もう六十六になるといふのに。髮は茸々として皺寡で。腰は屈まず目はたしかで。馬のやうな齒で澤庵の厚切を咬るから。物入齒だと想つたら入齒は唯四枚だといふ。第一骨太の巖疊造で。ぼちや〳〵と水澤山とは因果な事ぢやないか。まだ十年はあの娘も苦勞を爲することだらう。

「おや〳〵行過ぎた。車やさん二軒後の家だよ。」

「あら御母樣！」　とお鐵が格子を啓けて待つと。氣の無い聲で。「今歸つたよ。」

と毛絲細工のシヨールを渡す。之はお鐵の所有品なを。今日は寒いからとて時借をしたものと知るべし。

「御母樣。午飯は？」「未さ。」　と五音の調子は頗る不平を帶びてゐる。

「さう。なぜ食べて來なかつたの。」

「今日はそれ所ぢやなかつたよ。あゝお腹が空いた。お前もう濟むだのかい。」

「今し方。一人法師でおいしくなかつたよ。」

「何かお菜を拵へて？」

「魚屋がね。大變味美から味噌煮につてね。鯖を置いて行いたから味噌煮にしたよ。本當に旨い鯖。仕度をしやうか。」

「あゝ早く爲ておくれ。」

お〻餓い〳〵といひながら帶を解いて。暖めてある不斷着を取らうとして火燧を啓けると。襟が焦げて黃臭いほどの火氣。

「まあ此は！」　と慌てゝ火筋を取つて。おや〳〵〳〵と理けながら。

「お前まあ此火はどうしたんだねえ。襦袢が焦げやしないかね。」　と衣類を探すと襟の上には無くて。辷落ちて壁の方に固つてゐる。

「何だねえ。鐵。」　と不承々々に拾ひ上げると。

「何。どうしたの？。」　と臺所から覗いて。

「あら落ちてゐたの？」　ふゝゝゝゝと笑ふ。
「笑ひ事ちやないよ。おゝ冷たい。ほう冷たい。」と面を顰めながら幾度も身顫ひをして着て仕舞ふと。火鉢の側に坐つて先一服。
其内にお鐵は効々しく膳立をして母親の前に据えて。脱捨てゝある衣類を疊みに懸かる。
「御母樣。姉樣は何をしてゐて？」
「別に何もしてゐなかつた。」と飯に茶をかける。
「何とかいひましたか。」
「別に何もいひはしなかつた。」
「あら可厭な御母樣。」と手を停めて母親の顔を見込むで。
「どんな樣子だつたか些と話をなさいなね。」
「別に話をするほどの事はなかつたよ。」と鯖の骨附の肉を一口入れて。茱漬を挿むで又一口入れて。其箸を茶椀の中の茶でさら〳〵と濯いで。木地塗の二箇所ほど剝げた箸函にしやんと納めて。襟の小楊枝を抜取つて。「大層おいしい鯖だつた。」と膳を少し前へ押遣り。物思はしい顔をして歯を鑿つてゐる。
お鐵は此時を見て合點がゆかず。
「御母樣何だか鬱いでゐるのねえ。いつも姉樣の處から歸つて來ると御機嫌が良いのに。どうしたの。」
之を聞くと母親は憮然疊を瞶めてゐながら。一寸苦笑ひをしたばかり。直に又眞面目に復つて思案してゐる中に。啣えてゐた楊枝をぷつゝり前齒で咬折る。
どうも異しな樣子を氣にしてお鐵が又訊ねる。
「どうぞしたの？御母樣。」
「なあに。」と素氣の無い應答で拂はれて。お鐵は希有な眼色で母親の樣子を測量しては見たゞの。一向理は解らず。但不思議な事だと腑に落しかねてゐる。
衣物も羽織も帶も繻袢も疊むで。簞笥に藏はうと。起つて火炬の側を通ると。紙に包むだ物が遺ちてゐるから。拾つて開けて見ると貳圓札が一枚。一寸小首を傾けて。背後へ隱して。御母樣と呼び懸け。
「遺失物をした覺えはないの？」
「遺物？」　と母親は少し考へて。あゝと兩手で火鉢の緣を拍つて。
「あるとも。大事なものを。」
「無料は還さないよ。」と出して見せる。
母樣は笑ひかけて。「何所に遺ちてゐたえ。」
「御母樣是はどうしたの。」
「どうするものかね。私が持てゐたのさ。」

「ほゝゝゝゝ。不可よ。隱しても。」

「何を隱すものかね。」と極眞面目。

「不可よ。一寸此芳芬を嗅いでごらんな。」

と包紙を母親の鼻頭へ持つて行く。嗅ぐと香水の芳芬がする。

「好い匂がしませう。」

「するとも。」

「いけませんよ。隱しても。」

「何だねえ。」と母親は叱るやうな目で視る。

どんな眼をしてもお鐵は一向平氣で。「いけませんよ」を又繰返して。

「これはね。これは。ほわ……ほわあ……ほわる」と薔薇といふ舶來の香水の匂で。姉樣が手巾に布けるのに持つてるのをちやあんと知つてゐますよ。」

四相を悟る重忠がといふ鹽梅で。佐と見えをするほどお鐵の仕濟まし顏。御母樣ぎつくり。殆ど已むことを得ず。

「さうかねえ。」と苦笑。

「でしやう。」とお鐵は意有るがごとく首を傾げて母親の顏を覗きこむ。

「奢らうよ。」「何を。御母樣。」

「何でも好いものを。」「何にしませうね。」

お鮨にせうか。お蕎麥にせうか。いや〳〵直と飛でお鰻にせうか。其が一番好いのだけれど。餘り增長て熱を吹くと叱られるに違ひない。それぢやいつそ鰻に似てゐる骨拔鰌にせうか。お刺身も好いし。浦鉾を買つて附燒にするのも隨分旨し。

母親は舌の痛くなるのも忘れて思案煙草を吃しながら。切に今朝の無念を思返してゐる。

お鐵は一思ひに鰻飯と決めて言出して見やうか。「何だね。そんな大相な事を。」と遣られはしまいかと暫く躊躇て。任よと遂に切出す。

「御母樣。」とまづ呼むで見たれど一向返事無し。

「御母樣。」と最一度。それでも返事なし。

「一寸。御母樣。御母樣てば。」三度目は一寸といふ冠と。てばといふ省付で。餘程念入に呼むだれば。通じた代りに。「何だね。」と思つたより手嚴い挨拶。

其聲斜ならず不機嫌なり。

お鐵は慄然として默然。右の食指で左の掌に鰻のうの字を續け樣に幾許も畫いた跡を摩りながら。愼返つて母の樣子を視てゐたが。旋て火鉢の傍へ擦寄つて。また「御母樣。」と極小さな聲をして小當りに當つ

て見ると。從前の通り墨々として深く思案に暮れてゐる。火鉢の縁に持せて喞えてゐる煙管を見ると。雁首は疾に慤になつてゐるのを夢中ですば〳〵やつてゐる。お鐵はそつと煙草を撚つて塡めても知らず。火を挾むで點けたのも知らず。例の通りすば〳〵とやると。卒に來た煙を吸過ぎて。「えへ〳〵。あは〳〵。」ほゝゝゝゝとお鐵は笑ひ轉ける。

「何を爲たんだねえ。」と猶且煙草の事は知らず。正氣に復つた處が機會と。お鐵は奢つてもらふ註文をすると。

「大業な事をいふぢやないかね。」と察しの如く御採用がない文句なれど。其裏自から調子の弱い處あつて。此處から擊つて來いといはぬばかりの隙を覘つて口說立てれば。

「まあ御父樣に伺つて。」と意あるがごとく。遁げるごとく。然はさせじと追窮めて。到頭唯といはせて。

「まあ嬉しい。」

（七）

豐作には一粒万倍。手習には一字千金。毛詩には一日三秋。軍記には一騎當千。一の數を百。千。万に當てた語は幾多もあるが。茲に小姑は鬼千疋と唱傳へて。誰が割出したものやら。不思議な數理がある。愚案ずるに。何樣小姑といふものは嫁の身にしては鬼千疋でもあらう。尤も雪は白いに極つていながら。年代記には紅の雪降るといふ事もあり。仙家の雪は紫としてあるから推して見たら。中には子姑でも佛一躰といふやうなのが無きにしもあらざるべし。石といふものは重いに定まつてゐても。氣紛れにおらは水に浮いて見たい。と輕石といふ奴があるのも同じ理窟かも知れぬ。けれども雪といへば白い。石といへば重いに。人が合點する其理で。まづ小姑といへば。嫁たるものは。蛾眉を顰めて。あゝ鬼！と念ふが多く。實際もまた其が多いやうに見受けられる。

同種の人間である小姑が。何が故に鬼であるか。其又鬼の一疋ならず。百疋ならず。千疋であるかと考へて見るに。凡そ嫁といふ身上は殆ど一種の居候で。かの雨だれほどに戸を叩いたり。鐵納戸の茄子を食つたりする軟骨動物のごとく。食無魚と出無車が愚痴の種になつて。女主人の不興をおそれみ〳〵。氣輕に水を汲むで。言はれぬ前に障子の切張をするぐらいで。責任が盡くせるやうな生易しい食客とは譯が違つて。所

謂任重うして道遠く。苦勞が多くて不羈の寡い居候である。

はて何故といつて御覽じろ。第一に夫といふ。護謨の釣竿のやうな馬鹿に取扱ひにくい物の世話をせねばならぬ。鷺のやうな小鳥一羽飼つてさへ。少し放神してゐると。さあ事だといふ始末になる。況や萬物の靈長をやで。其手の懸かること。世話の燒けること。骨の折れること。氣の傷むこと。髮結さん少時と髮を握り。あれお歸りと哺を吐くなどは。恐らく九牛の一毛であらう。

其で又貞女は兩夫へ見えざる事になつてゐて。女大學にも唐土には嫁を歸るといふ。我家に歸るといふ事も也として。愁くとも後は寢易き蚊遣かなどゝ。どのやうにも辛抱をしろ。死ぬとも夫の家を出るなとまでに訓へられてある。そこで針の莚に坐らせられてもと悚へて。三界に家無しと諦めねばならぬ事にしてあるから。一種の居候で。また一種の終身懲役でもあらうか。

然し夫の無理とか。姑の非道とか。其外添遂げ難き事情があれば。無論離縁も取らうし。家へも還る。其をあの女が違つてゐるといふものは。一人も無い。けれども。其身の不幸とはいひながら。去られたにせよ。おん出たにせよ。兩夫に見えるといふ事は。兎にも角にも女の身には此上もない玷であるから。誰も死ぬのゝ次ぐらゐに可厭がる。さほどに可厭がる離縁沙汰であるから。自家から求むるやうな事の無いやうに〳〵。と寐覺にも思の種にして裝を愼まぬものはない。眞むこゝろに心になるが常情であらう。愼まぬのも隨分ある。其は人の屑といつて。紙屑。絲屑。鋸屑ほども役に立たねば。好したもので買手もない。

扨嫁といふものはこれほどに爲なければならぬものであるから。無能無効な猫の拔毛のやうなものかと思へば。寡夫に蛆が生くといつて。一家内にゐ米鹽薪炭の筆頭たる大事の品物で。家内の女王であるから内君といひ。内寶といふから寶でもある。さほど有難くもまた尊き品でありながら。給金を貰つた例もなく。優美を戴いた話も聞かぬ。而して居候のごとく。懲役のごとき。境界に墮されて。花散りて空しく梅法師となり。嫁古うして姑となる頃。やう〳〵樂をするのでもあらうが。其頃にはもう戒名が出來てゐる。右の通り嫁の身は夫一人で十分で。澤山で。精一杯で。之でも如何かすると。揮舞しきれない。いかにも人間

一匹の始末をするのであるから。此取扱い隨分至難いにい相違ないけれども。先方も一人。此方も一人。とところで先方は夫で此方い女房である。天の配剤妙なる哉は此處等であるか。男女の間には愛情といふものが天然と出る仕掛になつてゐて。此天産物の脂が兩性の間を和げて。軋轢を遏めること請合の妙藥に出來て。歌にも番ひ離れぬ鴛鴦の。詩曰死爲二同穴塵一、まづ恁云ふ格に行く譯のものになつてゐる。因で此愛情といふ和合劑の脂が。始は水のごとく。後にはとろ〳〵になるほど多量に分泌されると。夫婦二體が粘着いて。其から其上に脂が凝まつて粉衣を被けたやうになると。どれが夫の鼻だか。どれが女房の口だか分らぬやうになつてしまふ。此時を二身同體といつて。彼も無く我も無く。夫の心は妻の心。今日は花見に行かうか。向島へね。其が可い。お酒はおよしなさい。うゝよさう。と恁云ふ場合には琴瑟和合の關々雎鳩のといふ語などは已に迂こしい。

百人が百人恁う行きはせぬけれど。恁うもなるべき特効のある脂であるから。嫁が夫に事へるのは主人に事へるやうなものではない。よし那樣ものであつたにした所が。女蘿非獨生であれば。賴む喬木に搦むで。其惠を受けるだけの義理はせずには置かれまい。夫一式の世話は女房の役目である。それくらゐは固より覺悟の前で嫁にゆく。

然し。また攻撃するやうで恐れ入るが姑なるものは。實に贅肉さ。贅肉といふは嫁たるものゝ眼方をしていつた言で道をいへば夫の母であるから則是我母で。贅肉とは勿體ない。大した尊像ではあるが。彼と我との間には愛情の脂（夫婦の和合劑）といふ代物が湧かないから。何處までも心は他人で。此他人の氣を拔くには。例の脂より外に藥がないのだから爲樣がない。で。他人といふものは離れてゐると大相具合が好。あの人はと慕はしいのは。舞臺の上で役者を見ると同しで。近づいて見ると大星力彌に皺があつたりする。中將姫に青髭があつたりする雜風景は免かれない。欠點が見える。襤褸が出る。口論もすれば擲合ふやうな事にも及ぶ。其中にも女は。豚肉に蟲のゐるごとく。僻見と嫉妬と意地惡の三毒分を含む有機物なれば。女の字を二つ書けば「あらそふ」。三つは誰も知る「かしまし」で。途上に娘の行合ふのを見てゐると。まづ相對してゐる内は。お姫樣が花道に出たやうな狀で。擦違ふかと思ふと。双方の首が同時に捻れて。鬚の毛筋が通つ

てゐないとか。木履が何寸減つてゐるとか。精細に觀察して。やうやく得心して別れる。此執念の恐ろしさは。女難といつて男の相に表れるほどの邪氣を持つたものである。これほどの恐ろしいものが。此度は不思議な御緣とはいひながら。一家内に落合ふのであるから。嫁姑の間の四合行かぬのに論は無いといふべし。これがもし同等の權を持つたことなら。家内は修羅の巷。各の得手々々で。舌戰もあらう。組打もあらう。目覺ましくも又淺ましいであらうけれど。それ姑は母といふ御旗を飜して扣へたるがゆゑに。嫁は百歩を讓り。三舍を避けるは。敢て其威を懼るゝばかりではない。南方深く不毛の地に入り。孤軍糧竭きて夜胡笳の聲を聞く有樣であるから。心細いことは夥しい。援兵と頼む夫は敵が母者人の御事であれば。弓を彎くことが忸はぬ。それでは更に後楯にはならぬ。こゝが嫁の窘む所。姑の悍る所で。今は心安しと鎗襖を造りて無二無三に突蒐かる。嫁の方は何時も敗走して。小座敷の隅に匿れて。さく〳〵泣いふ話になるのだが。我子の非は見えず。他の子の德は見ゑぬ親心で。嫁のわづかの過失は精細に眼に入るところから。自然疎ましくもなり。憎くもなる。鹿想があつたから言つてやらうと思つても。他人だから先々と控へる。其控へる勘定が段々溜つて來ると。胸がむか〳〵爲だす。いよ〳〵爲る事が癪に障る。不和の基となる。其處までに到つては回復のなるものでないから。と嫁たるものは此禍を未然に防がむ爲に。まだ來て間もなく。姑も物珍しく。私の内も嫁が出來まして。と吹聽がてらに風呂へも連れて。御母樣お危うございますなどを言はれると。無性に嬉しくなつて。まあまあ雪のやうだと背を無理に流してくれる時分から。第一に機嫌を損ぜぬやうに。落度の無いやうに。お氣に入られるやうにと勗める。此氣苦勞が業に一通りのものでない。加ふるに主任には夫といふものがある。二兎を逐ふのであるから難い。然し其をも難しとせずに勤めなければならぬ身上だから。大抵の俠やお刻は尾鰭を動かしもせず。俎板に載せられた鯉のやうに。唯恨めしい顔をして責苦に遇はせる人を横眼で睨と睨むばかり。これほど可哀さうなものはない。其でも姑

の意は得難くて。半歳一年の間には機嫌も損ねる。尻尾も捉まる。やつさもつさが起る結極は。母親の貯金と嫁の身はいびられる事になつて了ふ。

凡そ女と生れ。人の嫁となるものは。前世いかなる宿業のありしかは知らねど。かくまで苛まれたら大方の罪は消滅しさうなもの。せずば社會が相談の上で帳消にしてやつても可いわけなのに。最も罪の深かゝりし女中衆てゝもあるか。此大姑の上に小姑といふ小附のある重荷を背負はされる御方がある。此小姑が小敵と見て侮るべからずで。姑の隱目附を勸めて。嫁の擧動は細大洩さず密告する。何日の何時頃お客へ出す茶菓子の何を撮むで。二口半に食べた事から。旦那に強話つて蒔繪の櫛を買つてもらつて。用簞笥の何番目の抽斗の何邊に入れてある。嘘と思ふなら持て來て見せましやうかまで附言する。此中に種々潤色をして。姑が氣を惡くするやうに話すと尤も妙なり。

之が又どういふ理であるかといふに。例の豚肉塊に外ならずで。この嫁が幅をする樣に見えて。おのれはいはゞ厄介物。と異う邪魔にするのが氣色に障る。といふ僻見から面が憎くなつて。返報がしたいにも力の及ばぬ爲に。虎の威を假りやうと御注進をやる。此注進が私怨を帶びてすることゆゑ。姑が自身に見たよりは一層利が強い。で。單嫁の非を計くばかりでなく。私が恁された那された。と陰ではどのやうにか小突廻はされる事を情なさゝうに哀訴するから。親子の情で之が又一層利が強い。

薪に油を沃がれては一大事と思ふから。目下ながらも嫁は待遇を善くして。無理も聞き。我儘をも通してやれば。其では此千疋鬼が滿足せずに又其上を望む。望むが滿たされなければ御注進で困らせる。困るから其慾をも滿たしてやると。增長して其上々々と募らす。我に法律なくして彼に制裁ありと賴むから。其兇惡は鬼といふより外はない。一疋の鬼では恁う手酷は行くまいから。鬼千疋！と嫁は怖毛を震ふのである。

（八）

扨爰に哀れを止めたのは澁谷夫人銀子で。彼は尋常ならぬ「むづかしや」の姑を持つてゐるか。姑は然した事もなかつたのが。月日の經つほど箔が剝げて。おひ〳〵に木地が見はれて來る。此頃の樣子では。素人畑の胡瓜を見るやうに。姑の心が變に曲り出して。餘程持餘ましの態。之さへあるのに鬼千疋の小姑が突然

出現した。小姑のあることは媒妁の話には無かつたものを。と今更いつた所で爲方がない。

其小姑といふは周三の妹でお滋といつて。熊本鎮臺の工兵中尉の城井泰造といふものゝ家内である。なるほど妁媒も話さなかつた理。白齒で家に居るではなし。餘所へ繰附いてゐた所で。東京にあるのではなし。遠い熊本に世帶を持つてゐるのであるから。此鬼とお銀との關係は。婆婆の人が牛頭馬頭を地獄變相の圖で見るくらゐのものであらう。これならば呵責に遇ふ理がないから。有ても無くても同じ事である。

ところが。此度城井中尉は東京詰になつて突然出京すると。旅裝束で直入に澁谷へ飛込むで。居宅の見當たるまでと捆の繩を解いて。何年ぶりといふ親子の對面であるから。三日でも四日でも車轅を炙るやうに。隱居とお滋の物語は絶えぬ。絶えた所で物見遊山となる。毎日のやうに親子連で朝から出懸けて。今日は歌舞伎座。明日は上野。淺草の凌雲閣。玉乘。花は無くとも久しぶりで向島。何のかのと七日ばかりも保養を爲續ける。家の人でも今は城井といふものゝ妻で。ともかくもお客であつて見れば。總菜で御膳といふ譯にも行かぬ。まして近頃は隱居の機嫌が好くない那裏で。此お滋がお氣に入と來てゐるのであるから。どうでも善くしなければいよ〳〵姑の感情を害する。其報は覿面お銀の眞向へ祟つて來る。

因でお銀が手の懸かることは普通でない。女の癖に酒を飲む。隱居も飲む。城井も飲む。夫は勿論飲む。毎晩夕方から四人一座て始めて。十二時近くまでちびるから一升餘も入る。それくらゐの事は我慢をしても。お銀を始として婢等から書生に至るまで。之が爲に奔走させられた擧句。夜は一時頃でなくては寢られぬのに。朝はまた六時頃に起きねばならぬ。隱居やお客樣方は夢の七つも見るほど寢て。手水をつかふか聞も無く午砲。

奉公人の嘆すことは！陰では城井の事を「長」。お滋の異名を「お長」とつけて雜言をいひあふ。お銀の苦勞はまた這麼ものではない。

姑といふものは湯屋で會つても。御法談の席でも。嫁の讒訴をいひあふが古今の例であるから。我娘といふ敵手を獲た日には耐らぬ。澁谷は役所へ出る。公用で留守になると。母子隱居所へ立籠つて。猫が水を舐めるやうな音をさせて。密談の種はお銀。かうだあゝだと隱居は小言帳を繰返して平常を打撒ける。其

勢といふものは。銀河の九天より落つるかと想ふばかりで。僻見七分の愚痴三分で。「今では周三まで一處になつて私を邪慳にする。もとはお前も知つての通り。實に優しい子であつたのが。此頃は宛然生れ變つたやうに慳貪になつて。何といふと私が悪いやうなことをいひくさる。それといふのも全くお銀が那麽に爲てしまつたのだ。」などゝ兩眼に涙を浮べて口説くから。お滋は。「どうも怪しからん。」と捨置かれぬ氣の先走りがお銀を憎む心となつて。「あんな優しい顔をして。猫撫聲を出して。御母様どうだの。お滋様云つたのと。懐つこい言をいふ口と腹とは反對で。えゝ小癪に障る。」の念があるから。お銀のする事爲す事其裏ばかり見えて。「なるほど御母様のおつしやる通りです。」「然うぢやらうとも。」と合體して變に突懸かる擧動をする。味方が一人殖えたゞけ隱居の偏僻が一倍劇くなつて。お銀は手も足も出なくなる。

中尉も着京して精々一週間も休むだら。出勤せねばならぬ身であるから。其内に借家を探して。一日も早く引移るが至當であるのに。二週間經つても二十日經つても。未だどうも思はしい家がないといつて此家から出勤してゐる。

貸家一目といふものさへ出來てゐる此東京に。どれほどの家を借りるのか知れぬが。中尉殿の住ふ家なら四五圓の店賃が精々であらう。そんな家は腐るほどあるのに。あの「長」は何處を探しあるいてゐるのか知らぬ。四五圓で土藏附の邸仕立の家などは花のお江戸にはございませんよ。熊本の山の中とは土の直段が少々違ひます。一月でも店賃と米代を庇はうと思つて。無い〳〵といつて御厄介になつてゐやがる。一體お國もの、といふと根性が汚ねつて。

無慚しくつて。貪婪が多いよ。と婢等は聞えよがしに陰言をいふ。之が耳に入つたら悉皆自分の咎になること。とお銀は獨り心を傷めて。止めても一向肯かずに。尻の長いのと。手の長いのと。舌の長いのが。癪人の中の一番厄介物だ。と之に手前節を附けて「車夫は門内の艸拐りをしながら鼻唄で諷する。

この尻の長い由來は。中尉のづう〳〵しいばかりでない。お滋が貪婪の根性から隱居を旨く説付けて。借家の見當らぬのを口實にして。居られるだけ長く居て。家賃と米代を掠らうといふ肚から。中尉には。生家だから幾日居ても構はないと御母様がおつしやるから。まあゆつくりお探しなさいなどをいふと。城井に於て

も押は輕くない方であるから。「然やうかの。」ぐらゐで依然其方針を取つてゐる。扨一月にもなると。汗漫の質の周三も餘りの事に思ふ矢先へ。お銀も女の事であれば相應に苦情を鳴らすから。實にもと嬉しくない顏色が母子の目に見える。もうお倉に火が着いたと曉つて。やう〳〵立退支度にかゝる。それも斷乎とはやらずに。最う二三日もゐたらどうか。と誰か言ひさうなものだと云ふ顏をして荷物を纏めてゐても。留めては一人もない。味方の隱居が獨り噪いで留めても。同ずるものがないから澁々出たのが一月と二日目！それも距れて家でも持つことか。人力車なら三錢といふ距離に搆へて。隔日にも往來をしやうといふ肚。閑散の身の隱居は。當座朝夕にちよこ〳〵と會ひに行く。其度に。「お銀樣。何か到來の菓子がござらう。一つ下され。」と抱へ出す。「鷄子か。鰹節の折はござらんかな。」と提げて行く。其も種が盡きると。午飯の總菜を重箱に詰めさして持つて行つて。自分も先方で食事をする。新漬を運ぶ。雑を持出す。種々蠶食して了ふと。其後は何でも手當り次第。干鰐でも切干でも。高野豆腐でも青豆でも。菜になりさうなもの。お滋の世帶の足になりさうな。と見た物は精々と運ぶ。これしきの事はお銀も何とも念はぬ。然し女といふものは心の細な。氣の小さいものであるから。這麼ことでも快いではないが。高の知れた事と一度も可厭な顏を見せず。唯々と言ふなり次第にしてゐるが。外に可厭な事は。なにほど良い嫁でも中位の我娘のやうには行かぬ。他人であつて見れば嫁でも遠慮がある。氣兼が遠慮もあつたで好いもの。これを取外された日には嫁の骨が粉になる。それが。恁う娘と行通をすると。愛情が其方へばかり傾くから。自から嫁に疎くなる。嫁に優しい言をいはれるより。娘の所へ行て劍突を食べる方が心地が快いやうなもので。此處が親子の情で。嫁といへば現在の娘。我子といへば過去の娘。どちらも娘なら親の仕向に二つはなささうなものだが。實子と義子を並べて手一つに傅をしたなら甚麼ものであらう。一枚の煎餅を分けてやるのに。四分六分に割るであらう。此情は自然のものであるから。其が強ち善くないといふではなけれど。おのれも一度は嫁をして來た身。可愛く思ふ娘も今嫁の身である事を念つたなら。我嫁へも煎餅の情を等分にするやうに勉めるが姑の本分でありさうなもの。口に忠義を言ふのと同しで。之が容易のものでない。其には小姑の

無いに越したことはないが。あつたにしても離れてゐれば。嫁は一厄遁れるといふものだが。かういふ事情では到底耐るまい。

日毎に往來して會ふ度の話の種はいつもお銀で。隱居は記錄でも讀上げるやうに。楊枝せゝりに昨日の所爲を恁だ那だと陳べると。お滋が爲たり顏で之に一々注釋をする。姑の會ひに行くも。一つは懷かしいからではあるが。半分は嫁の不平を泄すのが樂みで出懸けるのだから。今は嫁にどうされやうとも。お滋といふ味方があるといふ心持から。おのづと家に居てもさあ來いといふ風で。お銀に抗るやうな處がある。お銀は之が爲にいと〻遇ひかねて。辛いのを飲込むでも飲込みきれぬから周三に訴へる。周三は自躰小事に屑々たらざる性だから。一々取上げぬ。「唯然うか。辛抱しろ〳〵。我が附いてゐるから。」ぐらゐで。張合のないこと。綿を摑むで打着けるやう。

まゝよ。生れて持つた身分から見れば。數等立勝つた今の身上。家にゐた頃は。二子か瓦斯絲に。めれんす友禪の帶といふのが。かうして縮緬の羽織を寢起から着て。黃金の指環を穿めてゐられる身上になつたのを念へば。これぐらゐの苦勞はありさうなもの。肝腎の夫が優しくしてくれるのだから。之に優した事はない。あの姑だからとて生涯附いてゐるのでもなし。此家に波風の起るのも起らぬのも自分一人の了簡次第。と父樣に聞かせたら。然ぞ有爲奴と喜びさうな健氣な分別をして。何事も姑の心に悖はぬやうにして。お滋にも可厭な顏をせず。自分が妹でもあるやうに下から出て。腫物にさはる柳のしなひかな。まづ雪折れもなしに過ぎた。

それから一月餘經つて。お滋は隱居の口を藉りて三十圓の借用を申込むだが。隱居も周三へは言出し惡いと見えて。お銀に賴むとの御意。此隱居が近頃「賴む」などゝいふ重い語を用ふのは。殼蝋の裏から眞珠が出るよりも珍らしいので。流石に氣毒と思つたか。何となく言語が重複して。「あのな」「誠にの」などゝ煮切らない文句を挾むで。「お前さんから周三へ言ふて見てくんさいどうでも用達てゝもらはんければ。城井が差當つてえらう困るので。」義理の惡い借財があるといふやうな事を徹見す。

「どうでございますか。後刻旦那樣にお話しをいたして見ませうけれど。此頃は何だか御都合が……。」

此「が」と聞いた時。隱居の目は鮑貝を日向で一寸動か

したやうに。ぎらりと光つてお銀の眉間を睨みつけたのである。

「今晩にも御返事をいたしませう。」

「何分お願み申した。」とつん〳〵隱居所へ入つて。羽織を着更へて城井へ出向かれる。

(九)

お銀は周三が晩酌の間に此話をすると。以の外の機嫌で。

「貸すことはならん。」と言放つ。其勢に呑まれてお銀は次ぐ言葉もなく。煙管を拈つてゐると。

「今月は大分都合も悪いのだ。好かつたところが貸しはせん。」と宛然お銀が借主でゝもあるやうに慍りつける。

「でもお母様が那麼におつしやるものでございますから。どうか御都合なすつて半分でも……。」

「成ならんよ。今月はあゝいふ事情の費用で窮つてをるのぢやないか。都合の爲様も無いさ。然し。そりや都合して出來んことはないけれど。それほどまでにして貸す義理はない。お前は知らんけれど從來幾度貸したか。ついに返したこともない。第一あの家で那樣に金錢の入る譯はないのだ。城井は是といふ道樂のない男で。酒は飲まうけれど。藝者を買ふでもなし。球戯ぐらゐは滋の芝居を見るから思へば輕い事だ。それに二人暮しに婢一人で。月給で足りぬといふ事は決して無い。滋が自分の好きな眞似をして足らぬやうにするのだ。熊本にゐる時も貸せ〳〵いつて來て。お母様の前があるから何程か貸してやつたけれど。然う度々は此方も出來ん。あれば貸してやる。無いからいかん。さういうてお母様によう斷るが可い。」

「はい。」とは言つたが此役は儲からぬ。

「どうぞ貴方からお母様へ然うおつしやつて下さいまし。私からは何だか申悪くつて……。」

いかにもと思つたか。周三は頷いて。酒が濟むと隱居所へ話に出懸けた。

噫。またこれから一層御母様の目が光るであらう。お滋様からは憎まれるであらう。ひよんな事が出來たと獨り心を傷めてゐたが。果して翌朝の隱居の顏色と云つたら。何ともかとも謂はうやうが無い。

鋭く睨めたり。慳貪な聲をするのは。蓋し未だ不平の十分ならざる時の事で。此一段上を行つたら憤死するかと想ふばかりの險相で。睨みもせねば顏も見ない。

聲も出さない。唯是死灰のごとく枯木のごとく。冷然として沈思してゐる。朝飯も食はず。湯を一つ飲ず。全く隱居所に閉籠つて坐敷へは影も見せず。義周の粟を食はずといふ意氣組で。時々思はせぶりに唾壺を擊く音をいつもより暴かに響かせる。藁人形に五寸釘を打たれるよりも胸苦しく。お銀は得もいはれぬ心地で火鉢に取着いて額を抑へてゐる。

かねて合圖やしたりけむ。午が過ぎて間もなくお滋が來て珍らしくお銀に喋喋しく挨拶をして。今日の結髮は大相好くなどゝ空々しい世辭をいひながら。立つて隱居所へ行つたが。少時密談がありて出て來る顏は！お銀が當時を追想して魘される料にでもなると氣毒であるから。明細に書くのを遠慮するが。其は眞に凄かつた。御母樣いらつしやいと。呼吸の迫つた調子で呼懸けて。襖障子の開閉を仂なく手暴にして。隱居を伴れて。お銀には一言の挨拶も無く。ぷういと。出たぎり夜になつても還らぬから。夫婦は心配して。車夫の友藏を城井へ見せに遣ると。今晩は一宿。翌日も翌々日も御歸宅無しで。四日目に城井の婢が來て。御隱居所の簞笥の一番上の抽斗の紬のお羽織と。三番目にある霜降の南部の小袖とふらねるの單衣と。足袋を二足お渡し下さいといふのは。當分歸らぬ心算と見えたりとして沈思してゐる。朝飯も食はず。湯を一つ飲ず。全く隱居所に閉籠つて坐敷へは影も見せず。義周の粟を食はずといふ意氣組で。時々思はせぶりに唾壺を擊く音をいつもより暴かに響かせる。藁人形に五寸釘を打たれるよりも胸苦しく。お銀は得もいはれぬ心地で火鉢に取着いて額を抑へてゐる。

午が過ぎて間もなくお滋が來て珍らしくお銀に喋喋しく挨拶をして。今日の結髮は大相好くなどゝ空々しい世辭をいひながら。立つて隱居所へ行つたが。少時密談がありて出て來る顏は！お銀が當時を追想して魘される料にでもなると氣毒であるから。明細に書くのを遠慮するが。其は眞に凄かつた。御母樣いらつしやいと。呼吸の迫つた調子で呼懸けて。襖障子の開閉を仂なく手暴にして。隱居を伴れて。お銀には一言の挨拶も無く。ぷういと。出たぎり夜になつても還らぬから。夫婦は心配して。車夫の友藏を城井へ見せに遣ると。今晩は一宿。翌日も翌々日も御歸宅無しで。四日目に城井の婢が來て。御隱居所の簞笥の一番上の抽斗の紬のお羽織と。三番目にある霜降の南部の小袖とふらねるの單衣と。足袋を二足

其は承知して。お銀は玉簾一折と到來の鰻の蒲鉾に。新版の小說を二冊添へて。いつ頃お歸りでございますか。お待ち申してをります。と傳言をして還したが。攷へて見るに。是は容易ならず腹を立てゝ。私を苛む仕掛に相違ない。飛でもない事になつたと。お銀は氣が氣で無く。周三が退省るを待つて此次第を話して。

「どう致しませう。お迎ひにまゐつた所が迎もお歸りなさる事はございますまい。」といふと。周三は「つまらぬ眞似をしたものだ」と思ふらしい苦笑をして。

「まあそつとして構はん方が可からう。滋が好くない。」と舌鼓をして。

「そつとして置くが可い。」と至極落着いてゐる。お銀の身になつて見れば落着いてはゐられぬ。姑を突出した。餘程酷い事をするに違ひない。年寄が可愛さうだ。といはれるに極つてゐる。親類の手前も面目ない。女房に卷かれて非道を働き。親を麁末にするとは。學者にも似合はぬ鈍漢だ。と夫までが恥辱を搔かねばならぬ。其罪は皆嫁の身が被なければならぬ。して見れば世間へ對し。親類へ對し。我身上に大事が起らねば濟みさうもない。

夫に相談すれば構ふなと言ふけれど。構はずにはゐられぬ。此上は是非が無いから。年寄に心配を懸けるのは氣毒だけれど。生家へ話をして力を藉りるより外に手段はない。手紙では思ふやうに事情が解らぬから。御母樣を呼むで話さうか。否否隱居の留守を乘むで。母親を引入れて好事をしたなどゝ言はれぬとも限らないから。明日生家へ行つて篤り相談をして來やう。と其とは言はずに明日暇をくれといふと。夫は心快く承諾して。

然し無人であるから。正午に周三が退けて來ると入替りに出懸けて。直に歸つて來る心算で。朝の間湯にも行き。丁度結日で髮も出來て。さあと待てゐると。十二時二十分頃轔々といふ車の音。お歸りかと出て見ると。三池といふ周三の叔父で。苦い顏をして帽子を取る。續いて車が又一輛。これには伯父の樫村といふ。此一門での名高い御意見番。二人が格子を入ると又車が。其は此方の人である。

二人は顧みて。「これは丁度好かつた。」

周三は衣服も更めず挨拶に出ると。直に酒の支度をとお銀を呼ぶ。

「否。今日は御酒どころではない。」と三池が口を切ると。御意見番の樫村は詮議の筋有之といふ顏でお銀を一睨する。大方さうとお銀は察するほど無氣味で。こそ〳〵と次間へ竄げて酒の支度に取懸かる。其内に話が始まつた。埒とは聞こえぬけれど。「御母樣を」「お銀樣」「風波が」「辛くあたる」等の不祥の語が耳に入る。聊も我心に疚しいところはなけれど。背から冷汗が出て。身が竦むやうな心地がする。

烟も出來て。下物は後にしても。先一盃と膳を出すところなれど。どうも坐敷へ出悪いから。婢に運ばせやうかとも思つたが。親類が來たのに應待に出ぬといふ方はない。いつも出るのを今日に限つて出なかつたなら。心に怯る事があるから顏が出せないと想はれやうと婢に手傳はせて襖を啓ると。話がぷつゝり斷つたやうに寢むで。客の四の目が一直線に我額に注ぐと思ふと。赫として心が悸々〳〵。

何か言はれるかと氣遣ひながら。銘々へ配膳して酌をして退らうとすると。周三が。「少し待て。」「はい。」と坐つたが。その手持無沙汰なこと。何處へも顏の遣端が無くつて。身體が荷厄介になつてどうもかうも成らぬ。

旋て御意見番が和かな調子で。「扨な」を冒頭に。此度

の始末を一通り陳べて。昨日隱居からの手紙で。不取敢今日城井へ行つて一々聞いた所が。恁云ふ話で。と隱居とお滋との口上を聞いて見ると。お銀もえゝ！と吃驚。

半分は痕跡もない虛誕で。三分は僻見で。殘る二分は驚を鴉といひくろめた片口で。被せられた罪は綿まで透した濡衣で。餘りの事に辨解にも當惑して。可恐人等と思はず周三の顏が見られる。

それから筋路を正しく始終を話して。御母樣に然う取られますのは私の到らぬゆゑ此後は十分氣を着けてお世話をいたしませうから。何卒お歸り下さるやうに貴下方の御骨折を願ひますと頼めば。樫村は理の分かる性ゆゑ大概疑念が解けて。

「どうも然うであろうよ。隱居樣だつて餘り負けてゐる方ではない。若い時分强盜が三人押込むだ時。長刀の鞘を拂つて水車のごとく揮舞はした事もあつたのだから。」と酒も身に染みて來た樣子。

然るに三池の叔父の方は。元來隱居最負で。血系だけに似てゐる性もあり。醉へば即ち燃上戸。醒むれば可なり偏屈といふ人物であるから。心中大に服せず。此女の柔和に見えるほど肚は善くないのだと只管念込むで。樫村がお銀の肩を持つなら。我は何處までも隱居の尻押をしてやらうと兩派に分れて見ると。敵の酒は美くないか。これから城井へ行つて。まだ話す事もあるからと先へ還る。

此三池が一人あるばかりで話が纏らず。姑とお滋は益々悍立つて。彼嫁を出せと喧ましく言出して。お銀のある間は決して還らぬといふ悶着になつて。親類の誰彼が毎日のやうに磯谷と城井へ往來して。どうで御座るの。あゝで候ふのと結極が附かず。とにかく敵手は親といふので磯谷の方でも苦戰で。今の所ではどういふ事に極るか。運命は獨樂のごとく廻つてゐる。

之を聞くと生家の心配といふものは謂ふにも謂はれぬ新八郎は苦勞性の老人であるから。もしもの事でもあつた日には。と夜も碌々寐ずに考へて。一日隔に嫁妁人のところ樣子を聞きに行く。母親は母親で。女だけに取越苦勞をして。鬱とりと攷へてばかりゐる。

御父樣は焦躁。御母樣は憤然。お鐵は中へ挿まつて狼狽。日に四五度づゝは鉄かさず劔突を喉はされて脹れてゐる。

（下の巻）

（一）

扨も隱居の心は石に匪ず。轉すべからず。どうあつてもお銀を出さなければ。私は家へは還らぬと力む。樫村は手甲摩つて扱つたれど。お滋。三池といふ二人の影武者が附いてゐるので。隱居は益〳〵我を張つて。牡牛の乳を搾つてお目に懸けたら。といふやうな難題をいつて弱らせる。

いかにも。大事の母なり。一人の親ではあるが。無理は無理だと澁谷も腹を立てゝ。罪の無いものは離縁は出來ませぬ。と斷然した挨拶をすると。さういふ了簡なら。私も澁谷家代々の位牌にはなるまい。と隱居も凄いことをいふ。それではお互に穩でないから。と諸親類惣立で宥めたけれど。兎角隱居が無理ばかり言募るので。いづれも此處は手を退いて。今に目が覺めて。皆樣賴むといふ時があらうから。其折思入れ「搆うて下さるな」といつた口の端を抓つてやらう。今日の所はなづ〳〵默つてすつこむ事になつたが。周三の身になつて見れば。敵眛方と別れても。緣は繋がる親と子の間であれば。城井の食客にして。知らぬ顏もしてゐられぬといふので。月十圓づゝ扶持を送る事にして。一時落着した。

然し。先方が無理とはいひながら。親を別居させた紛擾の發頭人であつて見れば。お銀は寐覺に之が悪念で如何も快くない。

「親を逐出した」といふ調は我耳にも障る。無理をいはれても親は親。邪慳にされても姑は姑。それを辛抱するが嫁の身の務なり。又いかにも邪魔を拂つて爽然したやうに。いゝわで默つてもゐられぬ夫の手前。そこで義理と人情が糾むで。可憐しい哀願となつたけれど。周三は母親の氣の折れるのも今にと見てか更に騷がず。愁ひ手を着けると不可から搆ふな。と一向取合はぬので。其なりけりになつてしまつた。

生家では此紛擾が起ると。兩親は殺ど狂氣の沙汰であつたが。一先かういふ事になつたと聞いて。がつくりと腰の抜けるほど安心して。お銀から手紙の來た翌日赤豆飯を炊いたが。馬鹿に目出度のだからと赤豆澤山にして。いつその事麥の飯にしたら。恐らく一生脚疾は患ふまい。と父親が酒落たほどだから。餘程目出度かつたに相違ない。

さる親の申した。凡そ世中に麥麩をもらふのと女子を持つほど損なものは無い。女子にはいかほど丹精しても金を懸けても。預り物で。遂には手放さねばならぬに極つてゐる。扨外へ遣つてしまつたから其で縁が切れて。死なうと活きやうと搆はぬかと思へば。我子は何處までも我子であるから。苦樂を俱にせずには措かれぬ。して見れば生涯の厄介で。損は立つとも德には ならぬのが女子である。もし親たちの不心得から左團扇と目懸けたら。これほど德の行くものはあるまいけれど。親が女の厄介になるやうでは。相互の不仕合といふもの。

丸橋ではお銀を良家へ形附けて。ほつと呼吸を吐く間も無く。今度のやうな事が起つて苦勞をする。其苦勞が一息寢むだかと思ふと。直に胸に痞へるのは妹のお鐵の身上。

さる銀行に勤めて。今新潟に出張してゐる新輔といふ長男があるから。お鐵も他へ遣りもので。今年は十八になるから今が嫁入の旬で。十九までは盛といふやうなものゝ。お銀などは容色が好から。甘が甘一でも乞ひては許多もあるけれど。妹の方は三割も四割も品が落ちるから。一歲でも若い内が花で。女子を緣付けるのは。緣日の植木と同じ事で。時刻が遲くなるほど捨賣にしなければならぬ。と口を揉しに懸かると無いものので。兎角四合と適ふやうなのが見當らない。然うかりで。長し短かし。細し太し。圓かつたり角張たと思ふと。有り出すと又迷ふほど落合つて。都合三間といふもの前後に言込むで來たのは。一番に官員。二番に商人。三番が職工。官員といふのは年齢が甘五で郵便局へ出て二十五圓の月給。男親が一人ある。商人といふのは横濱の商館勤で二十枚の給料。これは兩親附の代り。地面家作が少々あり。年齢は廿七。職工といふのは砲兵第一方面舊砲兵工廠の小銃製造所に勤める鐵砲鍛冶で。年齢は廿八。月給は廿圓。之れ全く係累無しで。喧しい伯父があるが。別に世帶を持つてゐる。かう列べた所で。まづどれが好いと母親がお鐵に質ねると。官員は何だか嫌ひ。商人はどうも否。腕に藝のある職工がといふ好みに。兩親は膽を潰した。蓋し父親は。官員といふものを德川時代の武夫のやうに考へて「花は櫻に。人は喃」などゝ直にやらかす質だから。當時では何でも官員で無ければならぬやうに念つてゐる。母親は。誰に聞いたか。商人が一番割の好い利益の多いものだ。と素人了簡の商賣氣を出して

どうか商人へ遣りたい。それに横濱商人といふのは。異人を敵手で格別儲かると。混谷ぐらゐになれば大丈夫だけれど。卑い處では兎が恐いといふ肚で。二十枚と目懸けたのである。

お鐵も夫に持つなら。奇麗な仕事をする人をと思はぬではない。足で飯炊いて手で金延ばすなどゝいふ洒落から。鍛冶屋樣と極めた譯ではなけれど腕に藝のあるのが世を渡るに一番安心。所帶臭く考へて。眼中常に官員無しでゐたが。鍛冶屋とは少し豫想外であつた。

腕にある藝といつても。あながち職人には限らぬ。何も綠で職人でも否は言はないけれど。鍛冶屋の女房は御思案であるべき娘氣に。ぐつと色氣を捨てゝ。一思ひに其が望みといふには仔細がある。

この鍛冶屋を尋常の鍛冶屋と想ふと大いに了簡が違ふ七八年前まで近所は住むでゐた石黑信之といふ。兄新輔とは幼稚馴染で。自分も識つてゐる男である。其頃評判の孝行者で。堅人で。物の道理も解つた。お銀ちやんなども。あの人はと噂をした息子であつたが。父親に早く訣れて。學問の修行もしかねる所から。十七の歳鐵砲鍛冶になつて。わづか二年ばかりの間に驚くほど腕を上げて。母親をもどうやら過せるやうになつたと聞いたが。砲兵工廠へ出る事になつて。小石川の方へ引越してからは。久しく音信を聞かずにゐた。其信樣だ。職人でも。鍛冶屋でも。彼人ならば添つて見たいといふお鐵の所思で。御母樣。あの石黑の信樣ですよといふ。と然うさ。まあ不思議ぢやないか。あの信樣がもう二十七になるかねえ。人間は極良けれど職人がどうも。と一向進まぬ形で。御父樣も子供の時分知つてゐる石黑の息子なら不足は無い方なれど。右同斷鍛冶屋といふのが不承知で。最少し外に職がありさうなものだと首を拈る。

けれども。お鐵が切りに進むでゐるから。當人の緣だからと母親の思醜したのは。あの信樣といふ處に惚れて。あの子ならば確だと父親に相談すると。長らく職人をしてゐたのだもの。氣質も變らずにゐるものか。子供の時分の堅氣ではゐまい。と一應有理な言葉に。母親もなるほどゝ氣が着いて。お鐵にも此事を言聞かせる。それでは。舊時の氣質か氣質でないか。調べて見て下さいなとも言はれず。お鐵は可厭な顏をして失望の樣子であつたが。其代り郵便局も否。横濱も否と皆撥附けて。どうとも話は煮えずに。毎日紛擾してゐ

る内。喧ましいのと觸込のあつた。信之の伯父の瀬川又之丞が。中に入つたものから丸橋の娘といふ事を聞込むで。なるほど之は好からう。と信之に聞いて見ると。惡くはない挨拶で。まことに不思議な御緣だ。と早速丸橋に尋ねて來る。

伯父の瀬川から段々樣子を聞いて見ると。味方同士の片口であるから。一から十まで信にはならぬけれど。十分證據のある事が許多もあつて。信之の堅氣なことは十餘年前の信樣に異らず。伯父の口からいふは可笑なものだけれど。御遠慮無しに申上げると。あれなれば實にお薦め申したいとまで言出した。

一體彼工場で二十五圓以上取るものは上等の職工で。弟子の四五人づゝも使つて。皆職人風の勇肌で。大工の棟梁とか。左官の親方とかいつたやうな身持で。宵越の錢をつかはず。年中びい〳〵してゐるのを鋪强にして。華美がつてゐるのが風習であるけれど。信之は決して然うで無い。第一服裝からして堅氣に作つて。行蹟も職人風で無い。實直過ぎて偏屈のやうで交際を外すでも無く。優しくて實意のあるのが愛嬌になつて上役にも可愛がられゝば。下へも通りが好く。職も惡くない所から。隨分用ゐられてもゐる。

昨年の暮母親が亡くなつたが。それまでに。不自由だから女房を持てと度々勸めたけれど。未だ早いと云つて下女を置いて母の世話をさせて。自分は不相變孝行にして面倒を見てゐたが。親の亡後は男の身一つでは所帶が持切れず。此度嫁を探す事になつたが。信之の行蹟が甚麽であるか。私が喋つたばかりでは御得心が行くまいから。乘も角くも一日お出下さいまして。當人の樣子も見。また家の樣子も御覽下さいまし。申惡いことではございますが。職人風情の住居とは見えませぬくらゐ。整然と致してをりまする。

一口に職人と申すと。どうやら鎭合せの衣服に尻こけの三尺帶をして。袖の中に握拳をして往來を鼻謠で行くやうな人物と思召しませうが。彼の氣質の堅い所へ。私が大の偏人で喧しやでございますから。決して然やうな不行蹟はございませぬ。と伯父だか媒妁だか知れぬほど。感心な次第を種々並立てたので。丸橋夫婦の心は稍動き始めて。どうやら一思案して見る氣になつた。

（二）

瀬川の話に據れば。一口に鍛冶屋といつても了はれぬ

樣子で。活計も餘り苦しからず。厄介は一人も無しで當人は子供の時に變らず實躰といふ。譯になつて見ると。まづ相手に取つて不足は無い。それは如何いふものか。お鐵が切りに進むでゐるから。此話は纏めて見やうかといふ念も起つたが。今度は母親が乘らぬ加減で。澁谷の顏に對しても。妻の妹が鍛冶屋の女房では嬉くあるまいといふ遠慮もあつて。之は一寸お銀に談して見ずは。と出掛けて了簡を聞くと。信樣なら可いぢやありませんか。職工といつたつて種々類がありますわね。それくらゐの顏になれば。愁ひ小官員よりはどれほど好か知れはしません。伯父樣とやらの話の通りなれば。決して惡くは無いと思ひますから。尙能く一つ調べて御覽なさいまし。と何の苦も無く極められて。母親はなほ〳〵迷ひ出して。兎角職工といふのに我慢が爲きれず。鍛冶屋といふのにうんざりして横濱商人にまだ未練を殘してゐたが。二日過ぎて瀨川からの手紙で。明日は日曜で信之も家であるから。家內中で遊びに來てくれといふのは。家の樣子見やら見合やら兼ねて。何とも付かず手輕に呼寄せやうといふ肚。

こゝは鐵を伴れていつては拙い。我が一人で行つて見やう。と新八が出向く事になると。母親は氣を揉で。

「貴方は惚つぽいから可けませんよ。獨り惚込むで。うつかり約束なんぞをしてお出でなすつちや困りますよ。」

「宜しいよ。心得てゐるよ。」と五六つ頷くと。お鐵は後から羽織の衿を反しながら。

「御父親よく見て來て下さいよ。」

「柄の好のがあつたら買つて來やうか。」

と一同笑つて目出たく門出をする。

どんな樣子であらうかと二人は言暮してゐると。午後三時頃に父親は門口で嚶氣をして。折詰を二箇ぶら擧げて御機嫌で歸つて來る。待兼ねた母親とお鐵は左右から詰寄せて。さま〳〵な事を問懸けるので。何と應答をして可いのやら。さう一度に話す事は出來んよ。二人とも控へてゐて。我が一通り話して聞せるから。扨な。まづ家を出て新橋から鐵道馬車に乘ると。本町通りで線路を外しての。と言出すとお鐵が可悶がつて。

「御父樣。那樣事はどうでも可いから。先へ行つた所から話して下さいよ。」

「さうか。そんなに先を急ぐなら。道中は端折て小石川柳町にまづ着いたとする。柳町といふ所は新開町

での……。」

「そんな事も端折つて下さいよ。」

「無闇と端折らせる。鈍漢が驟雨にでも遭つたやうだ。註文なら爲方が無いから。思入れ端折るよ。づゝと端折つて。石黒の家を尋當てたとする。貸家ではあるが。一軒建の極新らしい一寸した家よ。格子造での。出窓の下には矮柏が植ゑてあつて。南向の二階屋だ。我が案内をするとの。瀨川が直に出て來て。皆樣も御一所だと心待にしてゐたのに。殘念だ〳〵といつての。まづ二階へ通した。」

「信樣は居りましたか。」と母親が嘴を容れるとお鐵は俯いた。

「まあ急くなよ。追々話すから。二階へ昇つて見るとの。八疊一間だけれど。實に小瀟洒として。道具建が好かつた。堺段子を一杯に敷塡めて。更紗の衾が三枚。桐の刳抜の手爐に櫻炭が埋つて。此方から三人行くつもりで待受けてゐたのだ。床には蘭が二鉢。掛花活には梅が入れてあつて。置物には。何だか自然木に蠟石のやうな青い玉が載つて。墨畫の山水の軸だ。時代な竹の聯に詩のやうなものが彫つけてあつて。斑竹の編むだ短冊掛に何とかいつたつけ。信之の句ださうだ。發句があつた。それから袋戸棚の下に唐机が一脚。これに種々硯だの。水滴だの。筆架文鎭のやうなものを列べて。筆筒に孔雀の尾が二本ばかり。右の方には書物が五六冊。其側に桐の手頃な本箱が對あつて。胡麻竹の茶棚に大分茶器類が奇麗に飾つてあつた。北の窓には小銃製造場の寫眞が金縁の額にして懸けてある。床の向ふが押入での。磯に千鳥の形のある襖で。明取の好い。風通の好さゝうな二階よ。南は掃出しになつてゐて。下が庭で。庭は中々手入が屆いたものだ。裏へ通ふ處に枝折戸があつて。其外には盆栽が澤山列べてあつた。我は瀨川に挨拶をしてゐると。階子の音がとん〳〵〳〵。誰だと想ふ。信樣だ？。大違ひ。四十ばかりの婢がお茶を持て來のだ。それから又とん〳〵〳〵。今度のは石黒だ。我を見て少し笑ひかけた處に子供の時の面影はあるが。いやどうも立派な男になつた。我家の新の所へ來て。お神樂の眞似をして遊むでゐた頃とは大きな違ひだ。十六七の頃も一向生意氣な風の無い。親孝行でもしやうといふ子だから何處か違つて。物柔な裏に端然とした處のある。依然其通りで。最一息威が付いての。どうもそれは人品なものだ。八字髭を生して。髪を撫附けて。絲織の小袖に白縮緬

の兵子帯をして。黒の奉書の三紋の羽織で。屹とした扮裝よ。擧止も閑雅で。口上も確なものさ。總躰しつとりとした鹽梅は。どうしても氏といふ奴は爭はれんよ。誰が見たとつて職工ぢや承知が出來ない。まづ四五十圓も取らうかといふ官員だ。鐵砲鍛冶だといふから。我は鼻の下や眼の邊を炭だらけにして。臍の穴を黒くして。鼠色の犢鼻褌に。襦袢一枚で出て來るかと想つたら。さうで無い。それから酒が出て中々の御馳走よ。塩末だと云ても馬鹿には出來ないものだ。」

といひながら折の莎繩を解いて。勿躰らしく蓋を取つて。

「この通りだ。こゝに鱶があるだらう。これは味噌吸の種だ。この汁の加減といふのが無つた。飲めたよ。」

「そんな事はどうでも可ございますから。それから後は。」

「信樣も御父樣御酒をお上んなさるの？」

「結構な事には大の下戸で。」といふと。母親は妙に眞面目で。

「それが何より。」と諷する所あるが如くに言ふ。

「何よりとは情無いのう。然し若いものゝ飲むのは憎いものよ。」

「老人の飲むのは厄介なものですよ。」

はつくしよいと大きな嘘をして。

「誰か我の噂をしてゐると見える。」

「それから御父樣どうしました。」

「それからの。勸めて二三盃さしたらの。いつの間にか梅醋漬の生薑見たやうに。爪指まで赤くなつて。この通り不重寶でございますといふとの。何處のも酒客は同し事をいふと思つて可笑くてよ。瀨川がいふには。まあ〳〵飲まないに越した事は無い。おれくらゐの年齡になれば少しは飲むが藥でと。悪く澄ましてゐたから。我も一寸。「御同樣に」と愛想をいふと。瀨川は如何もといつて笑ひ出したて。「飲むのが二人聚まつて。信樣はさぞ迷惑でしたらう。」と意あるが如き母親の詞に。父親は故と無貪着に答へた。

「さうでも無かつた。誠に喜むでの。どうか澤山召上つて〳〵と。我の飲みやうが足らんで不足に思つてゐたかも知れぬ。」

「何の貴方。そんな事を不足に思つて耐るものですか。」

「それから瀨川に案内されて。家探でもするやうに家

中殘らず見て來た。下は玄關が三疊。中間が六疊。奥が八疊だが。全く瀨川のいつた通り。男世帶とは想はれんほど片附いて。何處も彼も劃然と極つたものだ。餘程世帶持の好い男と見える。我は別に不服は無し。お銀も至極同意だし。本人は勿論の事だから。どうだ。極めやうぢやないか。鍛冶屋といつたつて。鼻下を黑くしてゐる鍛冶屋とは違ふよ。此日本帝國を守護する兵士の。最も有用なる武器を製造する役人だ。どうだ合手に取て不足は無からう。日本帝國を守護する……。」

「もう解りましたよ。」

「解つたなら言つて見な。」

「言はなくつても解つてゐますよ。」

「何解るものか。日本帝國の武器を守護する。兵士の最も有用なる製造の……どつこい。」

「おほゝゝゝゝ御父樣違ひました。」

「それ御覽なさいな。貴方だつて其通り……。」

「なに我は違つてゐても解つてゐるのだ。」

「貴方は實に惚つぱいから可けませんよ。」

「惚れて可いものなら早く惚れるのが目があると謂ふのだ。恐多くも日本帝國を守護し奉る。兵士の最も有用なる武器を製造する役人。東京府士族石黑信之の妻鐵子か。鍛冶屋の女房に鐵子は合性だ。」

「可厭。父樣は！」

（二）

母親は獨で不得心な顏をして見たものゝ。當人が得心で。父親が得心で。お銀がまた得心で。都合三得心に敵しかねたる一不得心。皆が然ういふ事ならと。爰に始めて四得心となつた處へ。瀨川又之丞が來て。どうで御坐らう。御承知は下さるまいかといふに。此方からも望む所と。目出度話が纏まつて。然らば紅葉をした羽田氏に媒妁を賴みませう。そこで之も儀式でござるから。一寸見合といふやうな事を。なるほど何處に致したが何うでざらう。左やう此見合といふものは。お互に手持無沙汰な。妙に冷たい汗の出る不氣味なものでござるから。家の中で顏を合せるのは廢止にいたして京橋の勸工場で落合ふといふのは甚麽ものでござりませう。之は新しくて至極お思附で。と來日曜の午後二時を合圖に約束をして瀨川は立歸る。お鐵は此前姉の事を哂つたが。今我身上になつて見ると。依樣誰の情にも差違はないもので。氣の揉めるや

うな。嬉いやうな。變に。不思議に。餘程妙な心地になつて。懼然として了ふ。之をむづかしくいふと万感交到るで。泥鰍の爪へ酒を沃けたといふ恰好で。心裏で何か無上に悶ゆるやう。さしあたつて夜寐られず。晝夢を見て。御飯が吭へ通らず。何か氣になつて。而して唯粧したくなる。其中に絶躰絶命の日が來て。京橋の勸工場へ出懸けたが。此日は父親が留守番で。伸人の羽田と母親と三人連。入口は繪草紙と玩具。曲る。入口は繪草紙と玩具。曲る。と瀬戸物に小間物。もう二時を打たから先方も直に來るであらう。後から來るか。それとも出口から入つて。待伏をしてゐるだらうか。と會ふのが主意で來ながら。其合ふの〻辛さ。辛さといふのは妥當で無い。辛いやうな心地。此「やうな」の三字が最も力がある。約言すれば羞かしいの極で。少しの間でも會やうにと。一寸逃れの氣が出て。もし出會つたら身を匿さうといふ下心から。母親と仲人の間に挾まつて。店の品物を見る目を偷に油斷なく働かせて。前後の人聲にぎよつとし。跫音にびくりとして。顏は上氣して火のごとく。胸は早鐘を撞いてゐる。

母親が。まだ見えませんねといふと。羽田が頻に前後を眴して。もう見えなければ成らない理ですがと話す一言毎に。毛孔から汗がたら〳〵と浸出す氣の不快。いよ〳〵時刻も迫つて來たと思ふほど。横を向くことも出來なくなつて。造りつけられたやうに。見たくも無い物をまんじりと視て。中頃まで來ると。「おや前面から」と羽田の聲。そらと思ふと體が竦むで。足が擧がらなくなる。

「さあ鐵や」と母親に手を曳張られて。我にもあらず歩き出して。唐木細工の店の前で。はたと出會ふと。首がぐつたり。双方で頻りに挨拶を始めると。姨樣いつもお變りなくといふのは信之の聲。舊時とは全で變つて大人染みた。底に濁のある。響く聲が耳に入る。竊と顏を擧げやうと思つても。どうも擧がる事が出來ない。「お鐵や。御挨拶を。」と母親に曳張り出されて。もう協はない。一寸顏を擧げた其間は。電光。石火。刹那。瞬時。と信之の姿を見たばかりで。後は唯腰を屈めて。にばかり物を言はせて。それでも挨拶になつて。下ばかり向いてもゐられぬからと。趣を變へて今度は横を向く。それから。御一所にと。これでもう〳〵澤山なのに。五人一群になつて。舊の道へ還す。此時の方が陰にゐられて。却つて能く信之を見る事が出來る。

勸工場を出ると双方へ別れる。今度の挨拶は前よりは幾分か確に出來たつもりで。信之の顏もどうやらかうやら見て。まづ氣が澄むで。ぶら〳〵煉化通を歸り道に。母親は今日の見合で大分惚込むだ樣子で。羽田を捉へて切りに褒めるのを。聞くお鐵の心地は不快は無い。

翌日羽田が結納を持つて來る。酒を出す。目錄を披げて。噫。美事な手蹟だ。石黑が認めたのでござるかと。父親が恐悅がると。媒妁は當感した顏で。左やう。伯父樣がお認めになつたやうでといはれて。まづつく。二日過ぎて。お銀の處から祝儀として。想桐の重箱笥が來ると。母親は嬉しさに價ぶみをして。安くふむで。父親に呵られる。お鐵は此中に一杯になるほど衣類が無いとて氣を揉む。漆臭い道具が毎日二ツ三ツ宛殖えて。坐敷に飾附けてある前に。綿が列ぶ。經節が列ぶ。長持と箪笥に場を取られて。父親は今夜から綱り二階に寐ることになる。

當日も逼るといふ大騷ぎの最中へ。お銀が顏出しに來ると。おやまあ大層だ事悉皆揃ひましたね。と妙に笑ひかけてお鐵の顏をじろりと見る。お鐵は嚮に姉を散々冷かした廉があるし。さうでなくても。お銀樣は一躰他を冷かしたがる方だから。どんな事をいつて謔はれるかも知れないと大きに恐れて。坐敷の隅に小さくなつて慎げてゐると。

「お鐵ちやん此度はお目出たうございます。」とわざ〳〵前へ來て。改まつて挨拶をされて。居耐まらずに臺所へ遁込むと。迹には三人で笑ふ聲がする。もう出ることが出來なくなつて。竈の前に立つて釜の緣を撫でゝゐる中に。幻の如く信之の姿が現はれて。自分と盃をしてゐる。あゝ死たいほど嫌りが悪いと思ふ途端。空中樓閣がが〳〵と壞れる一聲「鐵や」と母親に呼ばれて。振向くと障子を開けられた。火鉢の端に三人坐つて。皆此方を向いてゐるから。又顏を背けて釜の緣を撫でゝゐると。父親が肚では笑つてゐるらしい眞面目な顏をして。

「姉さんに御祝の御禮を言はんのか。」

其は知つてはゐるけれど。其處へ行き難くて。忸怩してゐると。母親が又。

「如何いふもんだね。」と窘める。

「鐵ちやん〳〵。」とお銀は例の氣輕に呼ぶ。それでも返事無しでゐると。

「可厭な鐵ちやんだね。含羞むでさ。そんな事で信樣

のお嫁になれるものかね。」

と お銀が諦ひつゝ窘める。

何と言はれても動かざること山のごときに。お銀も張合抜がして捨置いて。母親と話を始めると。父親が今度は極眞面目に。

「鐵。」と呼ぶから。もう好頃とやうやう坐敷へ出て。

母、親の陰から。

「姉樣。一昨日は有難うございます。」といふと。お銀は話を輟めて。

「どういたしまして。貴方も石黑樣へ御緣がお極りで。さぞお嬉くてゐらつしやいませう。あのお婿樣は當時何處に御住ひで。」

お鐵は俯むいて默然。

「お幾歳でゐらつしやいます。」と疊みかければ未だ默然。

「おや石黑樣の奥樣はお啞ね。」と笑ふと。お鐵は有合ふ煙管を把つて。竊とお銀の膝を雁首でぐい。

「あ痛。」と不意に駭いて立てた聲に。兩親は吃驚して。「何だ。」「どうお爲だ。」と目を圓くして訊ねる。

お鐵は澄まして。可笑さを忍むでゐると。お銀が。「鐵ちやんだね。」と肩を一寸衝く。「何を？」と恍けるお顔をお銀は呢と視て。

「お婿樣が附いてると思つて。他を虐めること。」と爲と悔さうにいへば。

「姉樣はもう否。」と袂を拂つて。怫然といふ鹽梅に立上る所を。

「まあ石黑樣の奥樣。」と留める。

「姉樣はもう……。」と母親の方を向いて。

「御母樣。姉樣が種々な事を言つて。」と憐を乞ふと。母親は嬉しさうに。吃々笑つて取合はず。父親は妙に眼底で笑ひながら。

「石黑の奥樣に違ひないぢやないか。」

「だから私が石黑の奥樣……。」

「解りましたよ。姉樣だつて澁谷樣の奥樣。」

「はい何でございます。」と落着き拂つて。「石黑樣。何御用でございます。」

「私はもう知らないわ。」

（四）

結納の交換も濟み。三荷の荷も目出度送り込むで。お鐵は唯わく〳〵してゐる中に。はや黃道吉日も今日となる。

お天氣で仕合だと喜むだも午前の事で。二時頃からぽつり〳〵と落ちて來たのが。まど〳〵と降出して。雪にもならず寒いこと。

「今はどういふものか行らないけれど。三頸の方が好いやうだね。」

とお鐵の頸に濃厚と塗りながら。

「お前お赤飯にお茶をかけた事があるだらう。だから這麼に雨が降るんだよ。」

と妙な事を責めると。又お鐵の應答が妙。

「お鮨にお茶をかけた事はあるけれど。」

父親は火鉢の傍で此妙な問答を聽いて笑ひ出し。

「鮨にお茶をかけると。大方お彼岸に降られるだらう。」と二人を笑はせて。

「天氣の好いのに幌をかけるのは可笑いものだ。雨で幸ひよ。」

と極無理な負惜みを言ふ。

こんな事を言ひ〳〵。仕度の出來た所へ燒妁夫婦が乘込む。そこで簡略な立振舞があつて。いづれ先方でゆつくり。といふやうな客な口上で膳を退き。五臺の人力車を揃へて小石川を指して急がせる。

旋て石黒の近所まで來ると。此所彼所の辻や軒下に。骨の折れた蝙蝠傘やら。番傘やらさしかけて。お神樣達娘子供が花嫁子を見物に出てゐる。車の音を聞くと齊しく。彼地の窓から首が出る。此地の格子から體が現れる。それらが無遠慮に噪ぎ立てゝ。其甚しきに至りては。從〳〵と車に近寄つて。阿部宗任が八幡太郎の寐息を候ふといふ身で。幌の内を瞰きこむのがある。暗い中に白いものが見える許で。あれは紀國蜜柑船だか。何だか解るものでは無い。お鐵は前桐油を楯に車外の樣子を見て。自分も那して近所へ來た嫁を見に出た事もあつたつけ。それが今は見られる身になつたか。と難しくいへば俯仰今昔の感に堪へず。御父樣や御母樣も年齢を取つた理だ。と思へば坐に心細くなる。姉樣が澁谷樣へ嫁く時には。別れるのが悲くつて。袂につかまつて泣いたらば。姉樣も泣いて。私の手を握つて放さなかつた。今日は家を出る時。誰も殘つてゐる人が無かつたから。それほどでは無かつたけれど。隨分可厭な心地だつた。よく考へて見れば。かうして。御父樣や御母樣と一所に來たやうなもの〳〵。今夜は私一人置て行かれるのだ。明朝からは石黒の家の人になるのだ。年に幾度と勘定するほどしか家へ行くことの出來ない驅だ。御父樣の肩が凝つても揉むものは無い。

御母様が頭痛で寐たら臺所を爲るものがあるまい。姉様とも今までのやうには逢へない。と念ふと浮む涙を指頭で拭いて。おや白粉が剝げはしないかと。懐中鏡を取出して見る。どうもなつては居ない。鏡を出した次手と。ほんの少しばかり曲つたかとも想はれる前髪を理して。延紙で油手を拭て鏡を仕舞ふ同時に。狹い路の片側長屋の格子戸の前に車が停る。お鐵は幌の中から竊と見ると父親の話に違はぬ結搆で。窓の前に垣があつて。矮柏が植ゑてある。此處で下りて。媒妁夫婦兩親に前後を圍まれて。俯いたまゝ。玄關から中間を通つて奥の八疊へ入ると。我家から送つた荷物の飾つてあるのを見れば。他國で知人に會つたやうに何と無く懐かしい。

話に聞いてゐた婢が香煎湯を持つて出て。お鐵の顔を上竈と斜視とで見て退る。嫁御寮は此時既に三分の正氣を失つて。帽としてゐながら心は落着かず。腋下から汗を出して。顔は熱る。頭痛はする。少時にして媒妁が彼方へと圖合に來ると。母親が唯と挨拶をして。「さあ。お鐵。」といつても。お鐵は逡巡してゐるから小さな聲で。「お盃だよ。」と聞くと。心臓がどき〳〵〳〵。裂けて一時に血が出たかと。想ふほど。動氣で。火に焙されたやうに惚身が熱くなる。此時はもう七分の正氣を失つて。何が何やら一向寤心で。二階まで伴れられたが。ふと坐敷の障子の硝子越に人影が見えたので。また心臓がどき〳〵〳〵。

坐敷へ入ると。三方の長熨斗。三組盃。雌蝶雄蝶の銚子など。草冊紙の大團圓で能く見る道具が眼前。下坐に羽織袴で。兩手を膝の上に置いて。俯首になつて控へてゐるのは。花壻の信樣（では無い）石黑信之。お鐵は赫として眼がくら〳〵。脚がわな〳〵。汗がたら〳〵。前後不覺の中に盃が濟むで。下坐敷に還つて來ると。始めて人心地がついたやうな。間も無く。二階で親類の盃が始まつた樣子。また彼處へ出るのか。と那樣事を苦勞にしながら。お鐵は獨り茫然。肱懸窓を開放して顔を冷して逆上を下げてゐる所へ。媒妁が呼びに來ると。續いて母親も衣替の世話に下りて來て。鬢を搔いてやる。顔をなほしてやる。彼此氣を揉むで坐敷へ伴れて行く。

そこで。鏡餅は重ねるもの女夫は並ぶもの。此出來立のほや〳〵の夫婦も。否應なしに上席に直されて。信之大いに閉口し。忸怩と外方を向けば。お鐵は尙以

て。横を向く。悪く酒落たら。雛段の地震といふ趣がある。媒妁は此處を見計らつて高盛を出し。本尊は床入で片附けて了ひ。さあこれからは此方のものと。袴を脱ぐ。扇子を捨てる。三人とも大量にもなつて。おもしろさうに飲み始め。十二時頃までに二升五合といふものを傾けた。

（五）

話説お銀の身上にかへる。例の紛擾以來引續いて。隱居は城井の一間に祀られて。當坐は頻りに崇められてゐた。其理。拾圓といふ扶持がついてゐるのであるから。城井家に取つては少しも損の立つ話でない。まづ五圓を食雜費に入れて。剩餘の五圓といふものは私費として。蝦夷錦の仕合袋の底に。番號の揃つた。折目の無いのを。二折にして仕舞つてあるのを。お滋は殆ど毎月の書入にして。「御母樣濟みませんけれど一二日……。」などゝ言ふと。其處は親子の情で。又色々世話にもなるといふ心から。唯々と貸してやる。返してもらはう氣も無ければ。返へさうといふ了簡も無しで。

如此重寶な。秀郷が龍宮からもらつて來た米俵のやうな。無盡藏の臍を持つてゐる御母樣の事であるから。何かと氣を着けてお滋は孝行をする。城井も此魂膽を表向は知らぬ顔の御存じであるから。隱居を邪魔にする所では無い。口には税が賦らぬと思つて。虎髭で掩はれてゐる鰐口を窄めて。御母樣かう遊ばせ。あなさいませ。おや嘘が出ましたな。お風邪を召すとなりません。滋や其の私の襁褓を。いや今日の飯は硬うてならん。貴方には好うない。粥にして上げるが可え。なのかのと至極優しい言をいふ。

隱居殿は眞に受けて。ほく〳〵喜び。實の子でも無い城井が。軍人のやうにも無く。きつう優しうしてくれる。其に。周三は如何いふものぢやあらう。嫁と心を合せくさつて。私を邪魔にして。年寄つたものを流人同樣に遇うて。私を城井の門から葬式を出す事か。それでも。滋といひ。城井といひ。揃うて優しうしてくるゝものがあるから。不仕合の中の仕合じや。と周三夫婦を情無く怨むだけ其丈城井を頼もしく嬉しがる。焉んぞ知らむ。周三といふものが無く。月十圓といふ扶持を仕送る源が微かつせは。隱居の境遇は甚麽ものであらう！

奥の四疊半に置炬燵をして。好きだといつて。床に花

を絶えせず。牛乳は異人臭うて飲めんから。半熟の鷄卵を二顆に。食鹽とスプーンを添へて。午餉には鶏を細く碎いて。齒齦でり潰せるやうに調へさせて。晩が五勺などゝいふ。寸方定行くものと心得らるゝか。これ大いなる不了簡の極度にまづ世間の手本を見るに。いはれぬ前に氣を利かせて。天氣の好い日にては洗濯の一つも爲ねばならぬ。孩兒のがあれば。孫の可愛さの酔興からといふやうな貌をして。傅もせずばならぬ。と一々數へ立てたらば。下女奉公人のすなる事をも敢て辭せず。喜んで其勞を執るやうにせねば。我娘はともあれ。聟殿が好顔をすることではあるまい。太甚しきに至りては。我孫を坊樣の孃樣のと。不倫千萬な尊號を奉りて。湯屋の女房や傭婆と間違へらるゝほどに身を墮さなければ。臺所の隅になりと舍いて。死水を取つてやらうといふ聟が多度あるものではない。已に此位にしても。十人が九人までは無くもがなと念はれる。嫁にやつた先方の厄介になるのと。茶呑友達を欲しがるのは。壽長き女の恥辱としてある。鮮魚と珍客は三日おけば臭くといふ。西洋の諺がある。當分は隱居も珍しいのと。十圓の扶持といふので。珍重されたやうなものゝ。日が經ち。月が累るに就けて。第一の要素の「珍らしい」が。消えて「差代りまして「厄介な」といふ感情が先城井の心に萌し始めると。踵いで第二要素の「月十圓」も。補充になる。重寶にはなるが。唐辛子も食慣けると辛味が鈍くなるがごとく。今では尋常のやうな氣持になつて。これ丈で入らなかつたら一寸困るのだが。さて入りつけて見ると。さまで有難くも無いやうな埋窟で。自分の方の爲前になる事は少しも感じずに。不利益になる一塊の老肉團が。悪く厄介で。兎角邪魔で。所で近來は餘り「御母樣」を唱へない。少しお滋がちやほやいふと。城井の御機嫌が麗しからぬ。

城井は軍人で。軍人といへば多く。杯を呼び妓を聘し。一醉王公を輕んずる的氣象の者であるが。城井は其例で無い。斗酒も敢て辭せずの豪飲はやるが。頗る愚痴上口で。尤も不斷から量の小さな。所帶臭い。戰場に臨むだら。敵の首よりは分捕を專一に働きさうな性であるから。面と向つて否な言こそ言はないが。頻に心の色を面に表はして。悟れがしに仕向ける。けれども。お滋が中に立つて。色々遠回しに宥めるので。隱居も心地は好くないけれども。今急に磯谷へ澄た顔で還る譯にも行かぬ所から。節を屈し。疳を抑へて。潛龍

無レ用と忍むである。其處で破裂も無しに。納まらぬやうに納まつてはゐるが。正に是機一發といふ處。所謂七分三分の兼合。一夜城井中尉が飲過ぎから舌を辷らして。ちくと癪を言ふと。腹を立てる段では。自分が無理でも膨れる代物の隠居だから。況んや理あるに於てをや。無料で置いてもらひはしまいし。怪しからん事をいつたもの。と散々に立腹して。慣て翌日は二食絶食をする。といふ勢。お滋が種々に詫びたので。晩には快く五椀召上つて下さる事にはなつたものゝ。隠居は肚裏に。此家は長く留まる處で無いと始めて曉つたのである。時に不運なるかな。官海の颶波穏かならず。鯰の大いに恐慌の折から。澁谷周三も非の字となつて。官制改革後であるから。三年間の涙金は下らぬ始末。手許に現金といつては。愧かしながら從來の生計を二月と續けるほども無い。幾分か氣強いのは。地所と我住むである家作と。外に株券が少しばかり。差當つては之を賣喰にしてなりとも。命の蔓にありつくまでは。籠城しなければならぬ。それも一二年の中に有附けば好けれど。長引かれると大事になる。まづ此家作を賣拂つて。四五圓の借宅に蟄居と極めて。時節の到來を待つの外無しと。恩顧の奴辨が暇を出す。入るものは書籍屋。道具屋。近所へは面目無し。自分は心細しで。お銀は夫が切腹せぬ顔世御前といふ思で。混雑する中に半病人で鬱いでゐる。恁る次第なれば。此際どうか勘辨して一所になつて下さい。それともお可厭ならば。六圓に減して不承してもらひたい。此二者何方か一といふ。掛合を城井方へ差向けると。隠居も吃驚。憎いの怨めしいのと謂へば謂ふものゝ。悪り息子が一世の浮沈。厩まで屬いてゐる家を出て。背の低い疎な杉垣に歳古る丸太の御門と いふ構は。餘り嬉くは無い。辛からうと夫婦の心の中も思ひやられる。又自分にしても。今こそ恁して聳の家の客分になつて。何不足無く暮してゐるのも。原は滋も大事にしてくれるには違ひないが。老の杖となるのは周三ぐらゐの事は隠居も心得てゐる。（但し之は近來悟つたことゝ知るべし。）其證據は。覿面六圓といふ減額六圓では。小遣も浮かぬ。然し此上は出し切れぬといふ其も道理。ではあるが此方も窮る。其で勘辨が出來ぬといふなら。一所になれといふ。今更一所になるも意氣地が無さ過る。六圓でどうか我慢はなるま

いか。それとも腕を撫つて一所にならうか。何方にしても昨日に變る身上を。心細く考へるばかりで。どうとも分別が着かぬ。

これは扨置いて。隱居は當座ほど珍重されぬのを。面白く思つてゐないのに。根が我儘の方であるから。一寸した事まで腹が立つて。こんな譯のものではあるまいにと「御母樣風の吹かせ損ひをして。獨り腕を惡くしてゐる。お滋も亦親子の心易立から。長い月日には隨分麁末な待遇もすれば。氣に障る言をいひもする。始めの内こそ。嫁の優しい言葉よりは。娘の劍突が嬉しくもあつたが。此頃になつて。見ると。城井の所爲の面白くない所から。自然僻見を及ぼして。お滋も餘り香しくもなくなつて來た。

因で折々は嫁の事も憶出される。周三も優しかつた。と考へると稍歸心が動き初めて。家の樣子はどんなであらう。一寸一晩泊で遊びに行つて見たいけれど。未練らしくて其も否だ。

先方から詫を入れて。歸つてくれといつて來れば。其を機に歸りたいものだが。今となつて此方から口を切る譯にも行かぬ。と些の意地ばかりで持つてゐた矢先へ。六圓といふ一大事が起つたので。さあ爰が考へもの。澁谷の言分には。十圓では送りかねるから。六圓で免してくれ。もし其で勘辨がならぬなら還つて下さいと。此挨拶では心から我に還つてくれろと頼む氣は無いので。六圓で否ならと。どうでも可い了簡なのを。有難さうに喜んで還る事もない。最少し辛い思をしても。客分であて見やう。周三だつて一人の親をいつまで妹に預けて苦勞をさせもしまい。今は未だ還る時節でないと。其趣を澁谷へ答へたのは立派であつたが。六圓の聲が懸かると。忽ちお膳に其反響がして。二尾の魚は一尾となる。鷄卵のお羹が葱ばかりとなる。その理窟ではあるが。今更のやうに隱居は顏を顰めた。金拾圓でさへも飽かれたのが。殆ど半分の減額であるから。これではほんの米代だけで。少し孝行の眞似でもすると。忽ち喰込む始末。それも城井の會計に。ちつとでも餘裕があるのなら兎も角も。從來隱居の臍を豫算に入れて繰廻してゐたほどの内證であるから。世話の燒けるだけも損に立つと。實の親であつて見れば。お滋もそらほど精算をしてかゝる譯でもあるまいけれど。打明けて言つて見た所で。十圓の時ほど嬉しくないには相違あるまい。是に於て城井は隨分頻くお滋に氣障な言をいふ。隱居は隱居で亦お滋に否味をならべ

る。中でお滋が大弱り。此分では迚も納まりさうも無いから。いつそ大悶着の起らぬ内に。澁谷へ還したが得策と。此節を隱居に微見して見ると。どうか物になりさうな驕梅であるから。かねて一味の親類三池方へ出向いて。自一至十を計して。舊の鞘に納るやうに話をしてくれと賴むと。其は我の口からは言難い。樫村めに其見ろといはれるのが業腹だ。我からでは却つて稜が立つて好くないから。お前が自身に周三に會つて然う言つたが好いからと斥られた。

（十八）

彼此悶着があつて。結極お滋が我を折り。隱居が角を折つて。多く請ふ本木に勝る末木無しで。姑は矢張嫁の世話になるといふ事に納まつた。

水の流と人の身は。今日に知られぬ飛鳥川。と歌でゝも聞くと豪勢意氣であるが。淵が瀨に變られた身のつまらなさ。外套の裾を朝風に飜して。はばなの煙を口髭に。竈めながら馬上優に出勤した姿は。玄關に跽まつて見送るお銀も適れ顯振と心勇むだものが。此頃では建附の悪い格子をがたくり引開けて。葱の味噌汁の噫氣をしながらぱく〳〵出て行くのを見るにつけて。

情無いやら。昧氣無いやらで。胸が一杯になる。それがお銀ばかりでは無い。親は親だけに。老婦は老婦だけに悲さも勝る。あのやうに身を卑して苦勞をしてゐるのに。と有繋に隱居も我儘を節むで神妙にしてゐられると。角に出はせぬ窓の月だから。お銀も自づと優くして上げたくなる。其處でやさしく爲る。喜ぶ。喜ばれる。やさしくするで。爰が家内の治まる大本とも謂つべく。御母樣といへばお銀樣やと。和氣靄然堂に滿つる澁谷家今日の有樣に於て。貧は諸道の障碍としてある本文が大いに疑はれる。

案じられるのは。此家内和合の樂は恐らく周三が再び出世の曉に忽ち霧消して了ふであらう。して見れば。他日の榮華は寧ろ今日の貧樂に如かざる譯であるが。それは唯の理窟で。富と貴きとは。人の願ふ所少々家内に風波があつても。不自由の無い方が先。と色氣を出すが常情で。一日も早く好い官途があれば。と隱居もお銀も只管それば かりを念じてある。

他の思ふほどにも無く。本人の旦那樣は綽々然として呑氣で。大概隔日に例の見そぼらしいぼく〳〵で出かけて。飛乘の辻車で四方を推廻し。同藩出身の大臣やら。局長やら。然るべき處の廂みにあるきながら。

恩はしい口も無くて歸つて來るのに。一向苦勞さうな顔もせぬから。少しは好話でもあるのかと思つて。どうでございましたとお銀が氣にして聞くと。さうお前のやうに急いたつてあるものでは無い。半年や一年で腐るものでもないから。氣長に待つが可えなどゝ。鰹節でも乾しておくやうなことを言つて。根から合手にならぬ。

お銀は獨り鬱勃念つても。向河岸の火事へ柄杓の水を打懸けるやうに。氣の揉榮も爲ぬといふもので。後には根負をして餘り言はなくなる。口頭にこそ出さぬが。心の中の苦勞は常尋で無い。然れど苦勞にしたからといつて。其でどうといふ事は無し。結句心を痛めるだけが損とは思ふものゝ。そこが凡夫の淺ましさには。兎角行末が案じられて。苦勞も心配も爲ずには居られぬ。

周三が一向無頓着でゐるのを。隱居も餘りの事と腹は立つけれど。面と向つて諧々言はれぬところから。何と無く其鋒をお銀の方に向けて。聞き辛いことを聞かせられるからお銀は耐らぬ。餘り切なさに。無駄とは知りながら折々周三に口說くと。おつに辭弄かされて。太平樂の仕舞は定文句の。我を誰だと想ふ。澁谷周三だ。お前たちを乞食にはさせぬからと大きく蔽冠せられて。すぐ〳〵お酌をするが例である。却說お鐵の方は睨む姑も無く。面倒な親類も無く。旦那樣は幼稚馴染の信樣で。成人したお坊樣と飯事するやうな樂世帶。慾を謂つたら蚤起が辛いか知らねど。亭主の出勤を送出して了へば。其から五時頃までは一人天下である。お薩の燕燒をして寐ながら食べて。お腹がよくなつたら晝睡をしても。誰が何と言ふものも無い。但戶鎖をしておかぬと。此近邊は下駄泥棒が行るから。と叔父さんの言つた通りの始末で。嫁に參りましたと謂はうよりは。舍兄の處に助手に來た方が適當らしい。

身分を謂はゞ職工。月の入高も輕少なもので。其に應じて活計もお麁末ではあるが。憚んながら宵越の錢は持たねえのさの肌ではなくて。生れ得て元來篤實一遍。元朝から後に近き大晦日の事を慮る質の信樣であるから。吝嗇にはせぬが奢侈がましい眞似も爲ぬといふもので。月給の四分の一は毎月相違無く郵便貯金通帳に記入されて。月に二度ほどは日曜日に夫婦連で遊山にも出懸ける。其內に懷姙の噂があつて。實家の兩親はころ〳〵懼ぶ。五月の帶といふ頃。丸橋の神棚の燈

明に三晩續けて大きな丁子が耀いたので。阿母樣は無上に目出たがつてゐると。果せる哉。澁谷内よりの文。

何を知らせて來たか。皆々樣御推もじ被下度候。（完）

博文館十周年紀念臨時增刊

太陽

第三卷第拾貳號終

本號ニ限リ定價金卅八錢

太陽定價　毎月二回五日廿日發兌

定價

一册（三百頁以上）金拾七錢
六册（三ヶ月分）前金九拾八錢
十二册（半ヶ年分）前金壹圓九拾錢
廿四册（一ヶ年分）前金三圓七拾錢

內地郵税一册三錢
外國郵税歐洲十四錢北米七錢

注意（本誌ハ前金ニアラサレバ一切發送セズ●前金切レ候節ハ直ニ遞送ヲ止ム●郵券代用一割增ニテ五厘壹錢切手ニ限ル）

販權所有

發行所　東京市日本橋區本町三丁目八番地　電話本局三百三番　博文館

編輯人　岸上操
發行人　大橋新太郎
印刷人　愛敬利世

廣告揭載料

三等（五號活字廿四字詰）一行金三拾錢　全廿四字六十四行　一頁金拾九圓貳拾錢

一等　一頁金廿三圓〇四錢
二等　一頁金二十圓拾二錢